
正し屋本舗へおいでなさい

剣岳 鳳哉。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正し屋本舗へおいでなさい

【Nコード】

N0334Y

【作者名】

剣岳 鳳哉。

【あらすじ】

就職活動をしていた江戸川 優^{えどがわ ゆう}は、ベタな出会いから「正し屋本舗」という少し特殊な職場へ就職した。「正し屋」の仕事は依頼人が持ち込む依頼を解決すること。

優はここで雑用兼見習いとして癖が強すぎる上司に弄られながら、妖怪や幽霊といったかなり特殊な仕事に向き合っていく。癒し成分はもっぱらペット(?)の雀と狛犬たち。色気より食い気な主人公は甘味好き。

ありきたりといわないで（前書き）

誤字脱字には十分注意しているつもりですが、もし誤字脱字などがありましたら報告していただけると幸いです。

あまり描きなれていないので色々と読みにくいところもあるかもしれませんが、精進していきたいと思っています。
暇つぶしにでも読んでいただけると嬉しいです。

ありきたりといわないで

慣れない重さと大きさのビジネスバッグが、私に現実を突きつける。

手に持っているビジネスバッグは男の人用なので持ち手のところが凄く持ちにくい。
ビジネスバッグはケチらないで新しいの買えばよかったって何度思ったことか！

でも最大の敵はビジネスバッグじゃなくて、ヒールだ。

ヒールなんて履きなれてない所為で、叫んでゴロゴロ転がりまわりたいくらいきつい。
足全体の痛みがそろそろ無視できない状況になりつつある。

しかもそこに天敵である、動きにくくて快適さとは無縁のスーツが加わるんだから恐ろしい。

色が黒いから太陽の光は吸収するし辛いなんのって。

移動するときは普通の靴とジーンズ、着替えやすい恰好のほうがいいかも。

会社の近くに来たら着替えればいいよね。

げんなりと人が行き交う街中でうなだれている私の名前は江戸川えどがわ優ゆうといいます。

某眼鏡の少年とは何の関係もない、しがない田舎者ですとも。

これだから都会は、なんてぶつくさ八つ当たり気味に呟きながら立ち止まって天を仰ぐ。

「（うーあー……なにこれ、凄くあつづいんだけど）」

ビルの隙間から見える雲一つない快晴は、今の私にとっては泣きたくなるくらい憎いあんちきしょうだ。

体中が水分を要求してる。特に喉とか口の中とか。

乾物の気持ちかわかる一歩手前つてところかなあ。

「（にしても、完全に就職活動を侮ってた）」

友達から就職活動が大変だと聞いてはいたけれど、まさかここまでとは。

あんまり器用なほうじゃないから勉強と就活を一緒にやる自信がなくて勉強を優先してたんだけど話だけでも聞いておくんだった。

次々に就職を決めていく友人たちに焦り始めたのは5日前。

まずは就職を支援している短大の就職課や公共機関を利用したんだけど、結果は 言うまでもない。

受かってれば、今こんな恰好してないもん。

「（ここは絶対大丈夫って言ってた就職課のおばさんが最後には神社でお祓いを受けてきなさい、だもん。ついてない以前の問題だよな……面接練習だって一発だったのに）」

はあ、と盛大なため息と一緒に肩が下がる。

うう。朝から歩きっぱなしだった所為で足は重いし、何十社も会社回ったけど全部落とされるし、本気で一回お祓い受けてこようかなあ……？

「そつえば、お昼ご飯もまだだっけ」

気づいてしまえば物凄く何か食べたくなってきた。

美味しいミートソースのパスタでもいいし、野菜とキクラゲが入ったラーメンも捨てがたい。

ああ、ハンバーグとかもいいなあ。

脳裏をよぎるお昼ご飯候補にうつかりよだれをたらしそうになった。危ない危ない。

今にも泣きだしそうなお腹を二、三回撫でてから気合を入れなおす。

（目標！食べ物のあるお店！目指せ！安い・美味い・早い！！ついでに美味しいデザートがあると文句なしの追加点！！）

えいえいおー！と心の中で自分を叱咤激励？して、棒切れを乗り越して電柱のようになった足に鞭を打って歩き出す。

でも、うん……現実ってやっぱり甘くない。

そんなの親が事故に巻き込まれて死んだり、テストで山を張ったのに外した時とかに思い知ったけど。中学生、高校生、大学と何度、数学のあんちくしょーに泣かされたかッ！！

数学なんてヤマが当たらない限りどーにもならないよ。

「（せっかく、色々応援してもらってるのに……なんで私って要領悪いっていつか頭悪いんだろ）」

高いビルや無機質な色のコンクリートに囲まれた、息苦しい灰色のジャングルで飲食店を見つけるのはとても難しい。

ビジネスバッグの中には地図なんてない。

目標の会社にはタクシーの運転手さんやらおしゃべり好きのおばさま方に教えてもらってどうにかたどり着けていたんだけど……周りには忙しそうに速足で歩くビジネスマンやらビジネスウーマンしか見当たらない。せめて、コンビニがあればいいんだけど、コンビニがありそうな雰囲気はまるでない。

「前途多難すぎる……うう、もっとしつかりしないとなあ」

脳裏をよぎるのは数々のネタ、もとい失敗談。

昔から抜けてるせいで普通の人はしないらしい失敗が多かった。

友達はそのな私を心配したりどうしようもないなーなんて言いながらも色々手伝ってくれたんだよね。

私から言えば皆がすごくしつかりしてるだけだと思っただけ。

「（応援してもらってるんだもん、頑張らないと）」

大丈夫、私はついてる！

特に人間関係は、うん、ついてる。他は色々不足してるかもしれないけど。

にしても、難儀な世の中だなあ。

友達には恵まれてるし、親が亡くなったとはいえっても祖父母がちゃんと育ててくれた。

今はもう育ての親の祖父母も亡くなったけど、高校の先生が凄く姉御肌？で色々アドバイスや手続きをしてくれたから大学にだって行けた。……奨学金という名の借金はあるけど、仕方ない。

他にも近所の人にもよくしてもらっていたのに、私は何も返せないまま就職すらままならないこの現実。

うう、ホント申し訳ない。

「（学生の方はそれなりに大変だったけど、楽しかったなあ。うう、すっごく戻りたい）」

大きな大きなため息を吐いて、足元に置いていた鞆を手にとった。何だか私を追い越していく人たちが皆、すいすいと前に進んでいくような感覚に陥った。

自分なりに“止まってはいけない”と思って足を前に動かし続けてみても、結局は止まったままで。

って、うわー……私、今まで人様に迷惑しかかけてないような気がしてきた。

「ハローワークに通うより新しい求人誌買って特攻した方が確実かも」

鞆から取り出した求人雑誌を握りしめる。

表紙にでかかど書かれている煽り文句が、ものすごく憎たらしい。雑誌からしたらとんだ八つ当たりなんだろうけれど、それにしたって“これで決まり！”なんてと軽々と表紙に書くものじゃないと思うんだよねッ！

ぐぬぬぬ、編集者に会う機会があつたら絶対ぜーったい！

「（私が総理大臣並みに偉くなつたら文句言つてやる！）ふ、ふふふふ……！」

暑さと疲労と空腹のトリプルダメージで思考が普段以上に支離滅裂になつてゐる気がするけど、もう知らない。

大体なんでビルばかりなの！喫茶店の一件くらいあつてもバチはあたらないとおもう！

この時の私がもうちょっと冷静だったら、人が行き交う道のと真ん中で拳を握りしめて笑うなんてしなかったんだけどね。要反省だね、うん。毎回学習しないけど！

太陽光でジリジリ焼かれていた私を現実に戻したのは全身に感じた衝撃。

手が、熱い。

小さくて硬い何かが掌に刺さって地味に痛いのと、何故か凄く熱い。あと体を感じる異常は、お尻がジンジンして……やっぱり痛いってことくらいだ。

えーと、もしかして私、電柱か看板にぶつかった？

チラチラと周りの人たちが尻餅をついてるらしい私と正面にある“何か固いもの”へ向けられていた。

勿論、周りなんてまるで見えていなかった。

数秒経ってから自分が尻餅をついた無様な格好でポカンと口を開けていることを自覚する。

「（あれ、もしかして私ってば今、民衆の面前で間抜けにも尻餅ついている…？）」

じわじわこみ上げる羞恥心と闘いながら恐る恐る周囲を見渡す。

つい先ほどまで私のことなんて眼中にもなかったように歩いていた人達がチラチラ視線を送っていました。

でも、その対象は私ではないらしい。

全くじゃないけど私のことはちらつと視界に収めてすぐに別のモノへ向けられている。

だって、視線が地面に座り込んでる私に向いてないのだ。

「（なんか、ずいぶん大きかったしもしかして看板とか電柱にぶつかった？）」

恐らく私が激突したのは大きなものだ。

それが看板や電柱でないことを祈りながら天を仰ぐ。

顔を上げた私は、こうしてベタで使い古された感じの出会いを
果たしてしまったのである。

ありきたりといわないで（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます！

次も最後まで読んでもらえるように頑張ります！えいえいおー！

食いしん坊といわないで（前書き）

個人的に実際に出会って一番困るタイプ〓美形。

絶対にいたたまれない。穴掘って隠れたい。

食いしん坊といわないで

結論から言おう。

ぶつかったのは人間だった。

思わずヒクリと口元がひきつる。

あっけなく地面と仲良くなった私の目の前にあったのは、電柱でも看板でもなかった。

アスファルト越しに伝わってくる熱と尻餅をついた時にぶつけたらしいお尻が、残念ながらこれが現実であることを教えてくれている。

ぶっちゃけ、有難迷惑だったりするんだけどね！

「（顔、あげるんじゃない……！！）」

後悔しても後の祭りだってことは、さすがの私でもわかったよ。

だって、相手がわざわざ屈んでるんだもんね！

……あの私なんて路肩の石ころだとも思っ
て、華麗にスルーしてくれ
ると非常に助かるんですけど。

これが言えたらどんなにいいことか。

ちらつと差し出された手から周囲に視線を向けると、速足に歩いて
いたはずの人たちが好奇心丸出しで私に注目してる。

足を止めてるのは女性が多いのは、たぶん私がぶつかった人の所為
だ。

どーしてくれる、こっ恥ずかしいよ！

眩暈に似た症状を覚えて、とりあえず頭をぶんぶん振ってみた。
少しすっきりしたけど、やっぱり注目されるのって好きじゃないな
ー……なんか変な汗が凄いよ。

とりあえず、いつまでも座っている訳にはいかない。

それにさっきから目が合ってるような気がするんだよねー。

逆光で見えないんだけど、眼鏡がキラめいてるし、空気も心なしが
キラめいてる。

たぶん、これが美形オーラってやつだ。だって自慢の女友達もこん
なキラキラしたオーラまってるもん！

……これで、心の奥底にあった「もしかしたら、強面のおじさんか
もしれない」という怖すぎる脳内候補は消された。むむむ、美人の
お姉さんだったらいいんだけど、シルエットからして男の人だしな
あ。

「すみません、大丈夫でしたか？」

頭は一応働いてたけど、間抜けにも口をあけたまま固まっている私に何かが差し出される。
とりあえず、ティッシュじゃないことだけは確かだ。

「どこか怪我でもしましたか？でしたら、病院へ…」

「だ、ただ大丈夫です！なんのっ、なんっの問題もないです！」

差し出されたのはティッシュなんかじゃなくって、綺麗な手だった。

一瞬、この人は手のモデルでもやってるんだろうかと思ったけれど、そうではなさそうだ。

声や物腰の柔らかさからして……お、おじさんのほうが良かったかもしれないなあ……！

「ごくり、と思わず生唾を飲んで身構えた私の脳裏によぎる一抹の不安。

「（ま、まずいよね、これ！じ、事務所の人とかファンの人に殺されるんじゃないだろうか）」

個人的に期待するのは、キラキラオーラは持つてゐるけど顔は普通の好青年だよ！みたいなオチ。

大概是、そうなる筈だ。

街中に美形がゴロゴロしてゐる筈がない。女の子やら女の人々は美人さんとか可愛い子率が高いけど、男の人ってそんなにレベル高い人いないって相場は決まつてゐるらしい。

「
…そう、ですか。では、ここは人目がありま
すし、ぶつかったお詫びをするなら落ち着いて話せる場所の方がい
いでしょう。荷物はこれだけですか？」

「荷物はそのバッグだけですけど……え?!こ、この近くに食べ物屋さんあるんですか!?!」

「喫茶店にありますよ。見つけないところにあるので、普通に歩いているだけではたどり着けない筈です。随分、歩いたみたいですね」

差し出された手をひっこめてもらって、私は自分で立ち上がった。知らない、しかもキラキラオーラをまとった男の人の手を握って立ち上がれる度胸なんて微塵もない。
後で握手料とか請求されても困るし。

目の前の人は、落ちていた鞆を拾って服をたたいている私に差し出してくれた。

ついでに、握りしめた所為でよれよれになった求人雑誌も、渡してくれたんだけど……その時に私は初めて相手の顔をしっかりとみた。

「（うん、見なきゃよかったな！アンタいる場所間違ってるよ！スタジオへ戻れ！ハウスっ！）」

もちろん、口になんてだせやしない。

出した瞬間に私はこの世に命を受けたことを後悔する羽目になると思ったから。

首謀者？そんなのファンの人たちに決まってるじゃないですか。

だれだよ、こんな眼鏡美人連れてきたの！！

街中に不釣り合いなとんでも美形連れてこないでよ神様！凄くいたたまれないよ！

生まれての方、普通くらいの容姿で生きてきた私にはかなりひどい仕打ちすぎる。

私はこの人がテレビやら雑誌やらに出てても驚きはしないね、う

ん。

「そ、そうなんです！結構歩いて疲れちゃったのでもう家に帰ろうかなーって思ってたところなんですよ。だから、お詫びとか全力で大丈夫なので、どうぞお気になさらず目的を果たしてください。こちらこそ、その、本当に失礼しました。今度から車と電柱と自転車、ついでに道行く人には気を付けます」

「そうですね、配慮に欠けていました。歩き通しでは疲れていて当然です。丁度、タクシーが来たのでこれで移動しましょうか」

そりゃないぜ、神様。

運よく？通りかかったタクシーを捕まえた彼はキラキラした笑顔を浮かべて、どうぞ、と私をタクシーへ誘導した。

つまり、もう逃亡は不可能だ。

逃走経路は完全に断たれて、状況は色々と絶望的。勘弁してほしい。

るーるー、と思わず遠い目になってタクシーの窓から空を見上げるけど、少しだけ視界が霞んでいた。
ぐすん。これは心の汗なんだ、きつと。

隣に座った彼は運転手さん相手に、これでもかといわんばかりの気品と優雅さ、ついでに金持ち感をばらまきながら行く先を指示している。

運転手さん、運転手さん、驚いてるのはわかるけど、口は閉じないとそのうち、涎でてくるよー。

「喫茶店には、5分程度で到着する予定です。飲み物だけではなく、軽食もあるので何か食べましょうか。オムライスや自家製パンのフレンチトーストが評判だと聞いています。デザート類も美味しいですよ」

「と、特に人気なのは？」

「アップルタルトと焼チーズタルトですね。どちらも何度か雑誌に載っていますよ」

隣の座席に座っている美形さんが言った言葉に思わずガツッポーズ。

私は、甘いものが大好きだ。
愛してるし、奴らはもはや主食であると日頃から声高らかに主張している。

ある種の極限状態にいた私にとって甘いもの しかも、
美味しいときた！ にありつけるといふのだからガツッ
ポーズだってうっかりしてしまうと思う。

「甘いものがお好きなんですね」

「好きじゃないです、愛してます。四六時中いつしよにいて、できればお墓の中までお供願いたいと心から思っています」

「これまで多種多様な方々を相手にしてきましたが、甘いものに対して愛を囁く人は初めてです」

背筋がむず痒くなる様な綺麗すぎる笑顔と、なんだか珍生物を見るような視線を頂戴した。

不本意とはいえってもこの手の視線には慣れているので、きれいさっぱり受け流す。

脳内を占めているのは、果てしなく甘美なスイーツたちの調べ。

うああ、どんな味がするんだろう！携帯電話と甘味との運命的な出会いを記録するノートを持ってきててよかった！！

テンションがぐぐぐーんと頂点に近い位置まで上り詰めていた私は、タクシーが止まると同時に財布に手をかける。

さっさと料金を払って甘味のもとへ行かねば！

「タクシーを止めたのは私ですから、私に払わせてくださいね」

「いやいや、相乗りって基本的に割り勘ルールが発動しますから！」

「わかりました、次からは考慮させていただきます」

さ、どうぞ。と、いつの間にかタクシーから降りた彼は、私が下りるべきドアの前にいた。

瞬間移動か！と戦慄した私は気づけば手を取られ、ついでに荷物も確保され、あれよあれよという間にビルの中へ。

どこからどう見ても、普通のビルだ。

地下へ降りる階段を下りて、どこの迷路だと悪態の一つや二つや三つきたくなるような道を歩く。

初めは一生懸命、道を覚えようとしたけど5回ほど左や右に曲がった時点で諦めた。地図があっても迷う。

「隠れ家的なお店ですねー。だけど、こんな立地条件の悪いところにあっってお店やっていけるのかなあ」

「それについても、お話ししますよ。まずは中に入りましょうか……お腹も空いているようですし、ね？」

「自己主張が激しいお腹の住人でごめんなさい」

「これだけ期待されれば店主も料理も嬉しいと思いますよ」

美味しい匂いに触発されたいらしい腹の虫という名の住人が歓喜の悲鳴を上げた。

うう、少しは状況を考えて鳴って欲しい。

とっさにお腹を押さえたものの、過ぎたものはどうしようもない。

楽しそうな声に少しの居た堪れなさを覚えたけど、ソロソロと彼のあとを追うようにアンティーク調の扉をくぐった。

少しだけ気になったのは、窓枠の中心に鏡がはめられていたこと。店に入る前に身だしなみをチェックしろってことかなあ。

スーツ着てるし、…追い出されたり、はしないよね……？

食いしん坊といわないで（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます！

次も最後まで読んでもらえるように頑張ります！えいえいおー！

世間知らずといわないで（前書き）

基本的に、怖い話は好きだけど怖いモノは嫌いです。

あ、あと色眼鏡とコンタクトレンズも嫌いです。
サングラス

世間知らずといわないで

見知らぬ眼鏡美人に連れられて、足を踏み入れた喫茶店はとても
雰囲気の良いお店だった。

地下にあるのに、暗いとかジメジメした雰囲気はまるでない。

店の中に足を踏み入れた瞬間、どこかで嗅いだことのある香りが鼻
をくすぐった。

食べ物の匂いは全くない。

ただ、お店全体に薰っている凜とした清々しい匂いに疲れが少し
ずつ溶けていくような感覚がした。
知っているのに答えが出てこない、独特のもやもや感にムツと眉間に
力が籠る。

「あの席に座りましょう、落ち着いて話すには丁度……
どうか、しましたか？随分険しい表情をしているようです
が」

「へ？そ、そんなに酷い顔してました？！」

「酷い顔、ではないと思いますが眉間に皺は寄ってましたね」

「こんな顔でしたよ、と茶目っ気たっぷりに再現してくださいましたの
はいいんだけど……顔のつくりが違うので正直比較の対象にはなり
ません。」

彼には美形補正があるかもしれないけど、私にそんな素晴らしいも
のは一切ない筈。
だからもっと歌舞伎役者みたいな顔になってたと思うんだ。

「お見苦しいものをお見せして大変申し訳ございませんでした。あの、この香りなんですけど……何の香りなのかわかりますか？どこかで嗅いだような気がして気になってるんですけど、答えがなくて」

「ああ、この香りは“菖蒲”^{しょうぶ}の香りですね。少し他のモノが混ざってはいますが悪いものではないので、安心してください。食事をしたり会話をする程度なら何の問題もないでしょうから」

上品で穏やかな笑みを称えた美形は、何をしても似合うらしい。着物姿で洋風の喫茶店にいるにもかかわらず何の違和感もありやしないのだ。

ときどき、神様って本当は不公平なんだって思うよ。そのキラキラの一つでも私に渡してくれれば、買い物するときに便利なのに！

一番奥の席に座った私達を見張っていたかのように、コックの恰好をした人が近づいてきた。

あくまで「コックの恰好」をした人だと私は思った。だって、脳内で描いていたコックさんのイメージをことごとく覆し

ているから。

筋肉隆々の厳めしい体つきに違わない、山籠もりから戻ってきたばかりのような風貌。

髪は撫でつけてあるものの、無精ひげはいただけないと思うんだ、私。

「久しぶりに顔だしたと思えば、なんだア？このちまっこいのは」

ザ・超重低音。

私たちが座っているテーブルの横に仁王立ちする大男さんから発せられた声はまさしくそんな感じ。

コックさんの服より、ヤのつく職業の人が着てる服の方が凄くイメージにベストマッチだよ！

うつかり壁際ににじり寄った私に気付いたのか、大男さんはジロリと高い位置から私を見下ろした。

「ひっ……？！っ、すいませんごめんなさいもうしません逃げませんから命だけは甘いモノ食べるまでとらないでください」

「誰が食つか……ッ！ツチ。おい、須川！なんだこのちびっこの！依頼人をここに連れてくんじゃねーって何度言やあわかんのだア？」

「おや？私がここに依頼人を連れてきたこと、ありましたか？ここにいる客が偶々（たまたま）、依頼人になったことは何度かあったと記憶していますが」

「……そーいや、今日はお前ら以外客はいねえんだっとな。んじゃあ、なんだ、このちまっこの」

どうやら、このおっかない人は眼鏡美人さんの知り合いらしい。

それはわかったけど：私、もしかなくてもとんでもない人についてきちゃったんじゃないだろうか。

「後で話しますよ。それより、私はいつものをお願いします。彼女にメニューを渡してあげてください、あとお茶もお願いしますね」

「しゃーねえな、ちょっと待ってろ」

相変わらずキラキラしい笑顔を浮かべた眼鏡さんに、大男さんは盛大なため息をついた。

衝立の向こうへ歩いていく巨体を観察しながら私は息をひそめる。いや、なんか目があったら何かが終わるような気がしたんだ。

私が戦々恐々としている間に、お水が入ったピッチャーとお洒落なグラス、メニューらしきものを持った大男がテーブルにモノを並べていく。

ことのほか、手つきが優しくて少しびっくりした。

「ほらよ。今日はオムライスセットがお勧めだ。値段は高いがどーせ、須川の奢りだろーから高いモン頼んどけや」

「高いといってもこの店じゃたかが知れてるでしょう。全く……これでもいいですか？では、このお勧めとアップルタルト、焼チーズケーキをお願いします」

「お前はいつものだろ？で、ちまっこいの。飲み物は？」

「……アールグレイのミルクティーで」

自分の背が高くて力持ちそうだからって馬鹿にするな！アリンこもミジンコも必死に生きてるんだよ！
そういいなくなるのをぐっと堪えた私は偉い。

大きな背中が店の奥へ来ていくのを確認した私は、すかさず彼が何者なのかを聞いてみたんだけど、返事はあっさりしたものだった。

「この店の店主ですよ。ここまでくるとどちらが本業なのか分からなくなりますが……ああ、そういえばまだ私も名乗っていませんでしたね。私は、こういうものです」

どこからともなくシンプルで無駄に高そうな名刺入れを取り出した彼は、一枚の紙を私の前に置いた。
一瞬、名刺ってどんなだっけ？なんて間抜けなことを考えたのは言うまでもない。

「（なに、この高級和紙使用の名刺。こんな手の込んだものみたことないんだけど）高そ……ええと、綺麗な名刺ですね」

「そうですか？まあ、あまり手の込んだものではありませんが」

「普通の名刺は持った時に色変わらないと思います。しかもこれ、和紙でできてるんですよね？うはー、すごいなあ……日本の技術」

初めはふつうの和紙だったのに、手に持ったところからサーツと色が透けた。

透明なアクリル板に和紙状の模様を加工してあるみたいだ。それだけならいいんだけど、花の透かしまでは言ってるんだから驚きもの。

最近の職人さんはすごいなあ、なんて光沢のある墨で書かれた名刺を透かしたり軽く振ったりしてみただけで元には戻らなかった。

「須川 怜至、と申します。貴女のお名前をお聞きしてもいいでしょうか？」

「え？あ、はい！すみません……えーと、私は江戸川 優といいます。名刺とかはまだ、その、持っていないので渡せないんですけど……って、そうだ！ちょっと待ってください」

就職先が決まってから作ろうと思っていたので名刺なんてないけ

ど、名前くらいはしっかり伝えておきたい。

メモ帳に書くっていう手段もあったけど、おもしろい名刺を見せてもらったお礼には程遠いから、面白味はないモノのそれなりに丁寧な字で書いた名前を見てもらうことにした。

「はい！いっぱい書いたのでどうぞ」

「…………履歴書、ですね」

「丁寧には書いてあるので読める時にはなっているとおもっんですけど、さっきの名刺に比べたら面白味がないですね」

「いいえ、私にとってはとても面白いものですよ。ありがとうございます」

綺麗な笑顔を浮かべて、履歴書を受け取った眼鏡美人こと須川^{すがわ}怜至^{れいし}さんは熱心に私の履歴書を読み始めた。

少しだけ緊張するけど、面接を受けてる訳じゃないのでずいぶん気楽だ。

あーあ。他のところでもこんな風にリラックスして面接受けられたらよかったのにな。みーんな怖そうなおじさんなんだもん！

少し手持無沙汰になった私は、改めてじっくりもらった名刺を見ることにした。

「あの、ここにかいてある“正し屋本舗”って社名ですよ？モデル事務所か何かですか、やっぱり」

「事務所はあっていますが、モデル事務所ではありませんね。簡単に言ってしまうと何でも屋、みたいなものです。少し特殊かもしれませんが、それなりの収入はありますよ
…興味が？」

「あります！どんなことするんですか？やっぱりペット探したり、浮気を突き止めたり、犯人を尾行したりするんですか？」

「似たようなことはしていますよ。人を探したり、物を探したり、場所を特定したり
…といっても、江戸川さんが考えているような方法ではないとおもいますが」

「へえー、なんだか探偵みたいな仕事なんですね」

ほんとにあつたんだ、とお水を飲む私に須川さんは苦笑して、懷から何かを取り出した。

深緑色の布に包まれていたのは写真。

若い男女の写真から子供が映っている家族写真、ペットを取った写真、家の前で記念撮影をしている写真、観光地でとられたと思われる写真……とまあ、統一感のない写真が30枚近くテーブルの上に広がった。

これだけみると、普通の写真屋さんか写真コレクターなんだけど……そういう、楽しい写真じゃないことはすぐに分かった。

「（なん、か……冷たくて、重い感じがする）これ、ってあんまりいい写真じゃない、ですよね？」

「……その通りです。私の本業はこういったモノを適切に処分することであつたり、目には見えないモノによって私生活がままならなくなっている方を本来の状態に戻す手伝いをしています」

「それって、もしかして……れ、霊能力者ってやつですか？」

「そういったものの一角でしょうか。まあ、霊能力者や祓い屋、霊媒師、退魔士などという職業を^{なりわい}生業としている者は、見えない方からすると胡散臭い職業でしょう？」

まさか本人を前にして「そうですね」なんて言えるはずもなく、とりあえず、曖昧な笑顔で濁しておいた。

でも、確かに須川さんはなんだか他の人とは何かが違う気がする。顔はいいし無駄にお金持ちそうだけど、そういうんじゃないかって……ここにいないみたいなのに、誰よりも近くにあるような、そんな不思議な感じなんだよね。

「他には、一二月祭り（じゅうにつきまつり）の手伝いもあります。命に係わる霊現象なんてしょっちゅうあるわけではないので、そちらの仕事は滅多にありません。代わりにそういった能力のある、もしくは“ある”と思い込んでいる”方の選定や斡旋でしょうか”

「な、なんか凄いことになってるんですね」

「最近はめっきり減りましたが、少しでも油断すると偽物やペテン師といったものが増えますからね。他にも問題としては依頼人の質、でしょうか。本当に困っているのか、それとも単なる気休めなのか……そのあたりの見極めも大切なんですよ」

どうやら、彼は霊能力者の紹介窓口に似た仕事もしているらしい。

一通り聞いたのはいいけど、お腹が空きすぎていつも以上に脳みその働きが鈍っている気がする。

彼の言っていることは理解できなくもないけど、正直、かなり常識から外れているとおもっ。

私はお化けとか幽霊はいるって信じてる方だ。

でも、進んで怖い目にはあいたくないし、遭^あおうとも思わない。

お化けや幽霊はテレビと本と口コミだけで十分だ。

……今更だけど、履歴書って名刺代わりになるのかな……？

世間知らずといわないで（後書き）

む、ちょっと短い…かな？

ここまで読んでくださってありがとうございます！

いいカモだなんていわないで（前書き）

書き終わった　！！と歓喜したのもつかの間、気づけばデータが消えていた罨（しかも2回連続で）

こゝ、これがしんれーげんしょーか！！（確実に違う

いいカモだなんていわないで

生き返った！と歓喜するのは、私の胃か脳か。

今の私は、今日一日の中で一番幸せだ。

空っぽになったお皿とティーカップを見て、ついさっき味わったばかりの極上デザートを思い出す。

程よい甘みのチキンライスがふわトロの半熟卵に包まれて、仕上げにキノコと野菜の旨みがたっぷりのデミグラスソースがたっぷりかかった美味しいオムライス！

付け合せの大根サラダもシャキシャキしてて美味しかったし、スープも野菜がゴロゴロ入ってほんとに美味しい。

そして衝撃的だったのは、リンゴタルトと焼チーズケーキ！

どっちもタルトの生地はサクサク。

チーズケーキの方は濃厚で舌触りは滑らか、甘いだけじゃなくてレモンと多分、柚子か何かだと思うんだけどその風味がこっ、いい具合に口の中に広がって鼻に抜けてく。

リンゴタルトはリンゴの煮詰め具合もさることながら甘さと酸味のバランスが文句なし。

でも、お気に入りなんていってもカスタードクリーム！すごい美味しかった！なんだあのカスタードクリーム！もう2〜3切れ余裕で入っちゃうよ！

二つともミルクティーによく合うし、私好みだし、是非ぜひティクアウトしたい。

「すごい、おいしかった……特にタルト！すごいですよこれ、絶対行列できますよ！」

「こんなに喜んでもらえるなら連れてきて甲斐がありますね。怪我もないようですし、安心しました。考え事をしながら歩くのは、やはりよくありませんね」

「わかります、わかります！私もよく、ぼーっとしながら歩いたり、半分寝ながら歩いたりすることがあるんですけど、そういう時に限って電柱やら看板にぶつかっちゃうんですよねー」

「よくあるかどうかは別としても、ああいう風に人にぶつかったのは初めてだったので、久々に驚きましたよ。不思議な縁もあるものですね」

偶然といえば、これは偶然。

でも偶然にしてはかなりの低確率だともう、お互いに考え事を
していて衝突するなんて。

これが漫画だと「この人は私の運命の人なんだわ!」とかつてなるんだろうけど、相手を見て、それから自分の顔を鏡で見るべきだ。

「(これがドラマか漫画なら間違いなく相手だけじゃなくて、ぶつかった側の人間も美人じゃなきゃダメなんだよ)」

ふ、と思わず遠い目になった私は悪くない。

自分の容姿くらい把握してるからね、うん。

須川さんみたいな人の隣に立つには役不足すぎるし、そもそも同じ
とこに立てる気がしない。

なんていうか、次元が違う。

「江戸川さんは就職活動中、でしたね」

「はい。絶賛就活中です」

「もしよければ、ウチで働きませんか？」

「……え？」

「考え事をしていた、といいましたよね？実は、私の事務所で新しく人を雇おうと思っていましたんです。商売柄、堂々と求人誌に乗せるわけにはいけないので、知人を訪ねていたところなんですよ」

そういえば、須川さんって霊能力者なんだっけ。

話をしていると忘れそうになるけど、改めて客観的に見てみると彼は確かに、どこか“特別”だ。どこら辺が特別なのかって聞かれると答えに困るんだけど……不思議な感じがするんだよね。

美形のオーラだ！って言われちゃえばそれで納得できるんだけど。

「知名度もある程度ありますし、基盤はできたので人を入れるにはいい機会だと思ってます。仕事の内容は貴女的能力に合わせて調整しますし、少しずつ慣れていけば問題はありません。給料は勿論、諸々の手当や保障もしています。必要経費はこちらで持ちますし、悪い条件ではないと思うのですが……」

「悪いどころか好条件すぎて怖いんですけど……そ、それに！私なんかを雇うより、もっとこう、能力の高い人とかそこらへんゴロゴロしてますよ？そりゃ、雇って貰えんと助かりますけど、生まれてこの方、一度もお化けとか幽霊とかそういうのみたことないし」

「能力が高いだけの人間なら探せばいくらでもいるでしょう。ですが、周囲に馴染みにくい場合が多いんです。正し屋は業界内ではお

そらく、頂点といっても過言ではないほどの実力があります。ただし、これはあくまで我々の領域……つまり限定的なものなのではない」

「んと、つまり、普通の人にも気軽に足を運んでもらえるようなお店にしたいから、普通の人間がほしいうことですか？」

「ええ、一言で言ってしまうえばそうなります。祭りのこともありませんし、地域には馴染んでおかないと今後、かなりやりにくい。そこで、正し屋の周囲の方に親しみを持っていただけるような人材を探していたんです」

な、なんだか過度の期待がかけられているような気がする……！
親しみやすい、っていうのは人によるだろうし、そういうのはやっぱり美人に任せるべきだと思うんだよね。いや、話しかけにくいのはわかるけど話してみたら意外と……みたいな展開がいいんじゃないか！

黙り込んだ私に、彼は複数の紙を差し出した。
つ、次は何？もしかしてこの店の料理って物凄い高かったりした？！

「雇用の条件です。記載している給与は手取りなので毎月最低でもこの金額が口座に振り込まれます。休みは基本的に週休2日制ですが祝日がある場合は祝日も休みとします。有給は1年で12日、といったところでしょうか」

「すみません、今日からよろしくお願いします!」

「……他にも条件がいくつかあるんですが、見なくてもいいんですか?」

「百聞は一見にしかず、です!それに、なんとかかなりそうな気がします」

白状すると、書面に書かれていた給与の金額を見た瞬間に決めま

した。

初任給でこれはない！これはないよ！！しかも手取りでこの金額とか破格すぎる。

こ、これなら奨学金だってあつという間に返せる気がする。

べ、別にお金に目がくらんだんじゃないよ！

説得力はないけど、霊能力者の人がどんな仕事するのも気になるし、普通とはちょっと違う職業って誰でも一度は憧れると思うんだよね。

私もお化け屋敷とか大嫌いだけど、怖い話は好きだし、テレビの心霊特集とかもよく友達とみてた。

肝試しの経験はないし、コックリさんとかもやったことはないけど、興味はあつた。

ありきたりだけど、霊能力とかがあれば、なんて想像して友達と盛り上がったこともあるし。

「では、この契約書に署名をお願いします。実印は持っていますか？」

「えーと、たしか鞆に……あ、みつけ！えーと、ここに押せばいいんですか？」

「はい ……これで契約成立、ですね」

「もうこれでハローワークと大学の就職課を往復しなくていいし、求人雑誌とにらめっこしなくてもいいんだ。それに動きにくいスーツも足痛くなるヒールもおおさらばできるって、こんなに嬉しいことだったんですね」

少し大げさじゃないですか？と苦笑する須川さんに、そんなことはない！就活って凄く大変なんですよ！？と苦勞談を力説した。

美形の苦勞は私にはわからないけど、同様に美形は私たちの苦勞なんて微塵もわからないのだ。

「なんだあ？お前、こいつの下で働くのかよ」

「ついさっき、就職完了しました。これで私も堂々たる新社会人の

仲間入りです」

どうだ！と胸を張っていると頭をゴワシツと掴まれて、そのままぐるんと半回転させられる。

首がグキツていったよ！あだだだ、もげる！もげるって！！！！

須川さんに背を向ける形で、私は上半身を捻る羽目になった。

うわ、最近というか運動なんて殆どしてなかったからバキツていったよ。やばいな、これ。

「喜んでるとこ、水差すよーで悪イが、コイツ、かなりアレな性格してんぞ」

「あ……アレ、ですか？」

現実逃避を始めた思考を現実に戻したのは、近くで聞こえる超重低音。

な、なんか、すごくエロまっちょりしてる！体の芯に響くっていうか、色々危険だよこの声！

頭にあった手がいつの間にか肩をつかんでいる。に、逃げられない！

「見た目に騙されんだよ、特に女はな。ちまっこいのにや、コイツの面アはあんま好みじゃなかったみてえだけだな」

「いや、好み以前に美人過ぎて怖いっていうか、あの、なんていうか世の中の不条理をうっかり覗いちゃった感じがします。隣に並んで歩けば、部下っていうより召使いかお手伝いさん見習いにしかみえません」

「よし！よく言った。ま、こんだけ図太けりゃ大丈夫だろ」

ペイツと元の向きに戻された私の正面には、相変わらずキラキラした笑顔の須川さん。

後ろで大男さんの狼狽えたような声が聞こえるけど、なんでそんなに慌てる必要があるんだろう？なんて考えていると、頭に衝撃。

正確に言えば頭を支えている首に大ダメージだ。

「あだだだだ！ーい、痛いっ！ち、縮む~~~~ッ！ー！」

「し、しっかしあれだな！中学生だか高校生だかは知らんが、最近のガキは随分しっかりしてらァ」

「雅。いい加減に叩くのをやめなさい。貴方のところの修行僧ならまだしも、女性なんですよ？」

「いや……あの、それより、私、成人して数年経過してるんで、ガキはちよっと」

「はア？」

「そういえば、この生年月日からいくと成人していますね」

大男さんの反応にも傷つくけど、そういえばって須川さん……貴方もさりげなく酷いと思います。
会話がぴたりと止まって、音は店内に流れるBGMだけになった。
うわぁ、沈黙って重かったんだね！

「……さて、随分長居をしてしまいましたね。江戸川さん、事務所には明日、ご案内いたします。引っ越しも同時にする予定なので家に帰り次第、荷造りをお願いします。家具やベッド、その他日用品で必要なものは新しく買い換えましょうか。もし思い入れのある家具などがあれば、引っ越し業者に言ってくださいね」

「え？ちよ、ちよつと待ってください！ひ、引っ越し？」

「ここに書いてあるでしょう。雇用条件の一つ、事務所での住み込み、と」

「ほ、ほんとだ」

「お前、読んでなかったのか？ふつー、目くらい通すだろ？！」

「いや、だって……就職する方が大事だったし」

もし、雇用条件をしつかり読んで躊躇したら踏ん切りがつかなくなりそうだったんだもん。

条件の中に“頑張りようがない”条件があつたりなんかしたら、サインはしなかっただろうし。

後でじっくり見ようと思ったんです、なんていっても大男さんは信じてくれなかった。

……たぶん私も、なんだかんだで見ない気がするんだけどさ。

「（引越し、かー……心機一転！って感じ。ちょっと不安だけど、何とかなる、筈）」

自分にそう言い聞かせながら、テーブルの上で小さな水溜りを作っているコップを手取る。

汗をかいたグラスは、ひやりと冷たくて、とんとん拍子で就職したことが嘘でも妄想でもないことの何よりの証明のように思えた。

「（うん、これも、きっと何かの縁だね。応援してくれてた人に恥ずかしくないように、ちゃんと、がんばろう）」

氷が解けて、中に閉じ込められていたミントの葉がぷかりと浮かんだ水を煽る。

清涼感のあるミネラルウォーターが喉を滑るように落ちていった。

いいカモだなんていわないで（後書き）

悔しくて不貞寝したので更新が遅れました。無念。

ここまで読んでくださってありがとうございます！
次もがんばるぞーい。

閉話 カモはネギをしょっていく？（前書き）

一応、これで序章的なものは終了、の予定です。

さ、触りにしては長かったなー（遠い目

閉話 カモはネギをしょっていく？

私の部屋は今、すっかりかんになっていた。

余計なものがなくなって、一番初めの
： なにもない、何も入れない状態になった部屋を見て思わず、ため息がこぼれた。

一般的な女の子よりは少なく、男の人よりも多い荷物はものの1時間ほどで外に運び出された。

ビニールシートの上に広げられた家財道具を見て立ち止まったり、何事かと尋ねる人は多かったけど、比較的近所付き合いは良かったので変な誤解は受けなかったと思う。一応、ちゃんと説明したし。

「昨日の今日で引っ越しなんて引っ越しの神様だってびっくりだよ、

きつと」

空っぽになった部屋から出た私は、ブルーシートの上に広がる家財道具を見て回った。

引っ越し業者の人たちが丁寧すぎるほど丁寧に扱っていたのは基本的にホームセンターで買った組み立て式のものだ。

運び出されている最中、物凄く申し訳なく思ったのは言わなくてもわかるだろう。

すつごく申し訳なかった。うん。

「（でも、引っ越しの費用どころか業者さんの手配までしてくれる会社って滅多になに、よねえ）」

引っ越し宣言を受けたのは昨日。

で、引っ越しは宣言通りに行われた。

驚いたのは、引っ越し業者の人が殆ど全員女性で構成されていたことなんだけど、こっそり話を聞いたらそういう指定を受けたらしい。

まあ、引っ越しとはいえ男の人が部屋に上がって家具を運び出すのって少し、気後れするし。

一応こんなでも女だから、見えないところの埃とか賞味期限がアレな缶詰とかは見られたくないわけです。

「江戸川さま、室内の確認ありがとうございます。不備などはありませんでしたか？」

「あ、はい。名前を書くのってここでいいんですね？」

「……、はい。ありがとうございます。丁度、鑑定が終わりましたので、確認をよろしくお願いいたします」

恭しく頭を下げた一番偉い人っぽい女の人に見送られ、ビニールシートの前に立っている人に近づく。

敏腕鑑定士！という看板を背負っていてもおかしくない知的美人は私と目が合うとうつつすら微笑を浮かべる。

美人だ。問答無用で美人だ。私が男だったら、今この瞬間にどうやって連絡先を聞き出すか考えていただろう。

「お待たせいたしました、電化製品を含む家財道具をすべて算定させていただいた上村と申します。今回の引き取り金額ですがこの金額になりました。確認をお願いします」

「え、こ、こんなに！？い、いいんですか…？これ、殆ど組み立てたものだし、電化製品だって結構長い間使ったのに」

「使用状態が大変良かったのでこの金額になります。同意いただけましたらこちらにサインを」

言われるがままにサインをした私ははっと我に返る。

実は、雇用契約書にサインした後、その場にいた大男さん

…もとい、黒山^{くろやま} 雅^{みやび}さん

…にしこたま怒られたのだ。

契約書の類にサインする前には、必ず隅々まで目を通せ！って。

本気で食べられるかと思った。重低音って、ほんと体の芯に響くね……一瞬、地震かと思った位だし。

今回の引っ越しんだけど、実は『契約後は速やかに住まいを「正し屋本舗」事務所二階の住居区域へ移し、そこでの生活することに同意する』って雇用条件の欄に書かれてたんだよね。

引っ越し自体はいいとしても契約した翌日に引っ越してというのはいくらなんでも焦りすぎだと思う。

何か理由があるのかな、なんて考えたりもしたけど、さーっぱりわからなかったので諦めた。

「（にしても、私にとってホントに大事なものって鞆一個で間にあつちやうんだなあ）」

必要最低限の貴重品は友達にもらったアクセサリーと形見のダイヤのネックレス（といっても結婚指輪をネックレスにしたやつだから、ダイヤっていつても小さいんだけどね）、あとは貯金通帳とお財布、携帯電話と充電器、連絡先が書かれた手帳と卒業アルバムが3つだけ。

服や下着といったものは何故か処分するよう言われた。

よくはわからないけど、言われたとおりにしていくうちに大切なものは見事に旅行用のカバンに収まったのだ。なんだか自分がものすごく、小さい人間のように思えて悲しくなったのはここだけの話だ。

うう、鞆一つの青春とか虚しすぎるんですけど。

引越し終了を見計らって到着したタクシーの中で、諦めにも似た笑みがこぼれた。

あー、運転手さん、いいんです。放つといってください。
いますごくく荒んでるんで。

よし、こーなったら、あとで甘酒を自棄呑みしてやる！

「……こ、この中から、ですか」

「気に入ったものがないようなら作らせます。希望はありますか？」

私が就職した会社の名前は『正し屋本舗』という少し変わった会社だ。

でも、そうじゃないことがわかった。

変わっているのは『正し屋本舗』という会社ではなくて、経営者

そう、須川さんその人だった。

彼の容姿が整っているのは一目見ただけで十分すぎるほどに理解できる。

それに身に着けてる服とかモノから高級感が漂ってるから、お金はあるんだろうなーとは思ってたけどここまでだとは思わなかった。

「……………須川さん」

「なんででしょう？」

「多分、ちょっとばかり私と須川さんの金銭感覚にずれがあると思

います」

「そういえばそうですね。先ほどから安いモノばかり見えていますし……これはよくできているように見えますが、まだまだです。あちらに置いてあるものの方が素材も職人の腕も格段に上ですから、あちらの方がいいでしょう」

「ちょ、ま、待ってください！そーじゃなくって……あああ、ストゥプ！お願いだから早まらないでください！桁っ、桁みて！――一桁どころか二桁多いです！」

「この価格なら安い買い物です。ですが、このデザインは女性には向きませんね。クローゼットはあるのですがもう少し小さめの箆笥と姿見を買いましょうか。木も悪くないですが、陶器製のものもあるようですし、そちらも見て決めた方がよさそうですね」

一人、何かを理解したように頷いたかと思えばすたすたと別の売り場へ歩いていく。

私はそれを追うのに必死だし、追いついたら追いついたで高級家具をポンポン買いそうな彼を止めるのに必死だ。私こんなに疲れる買い物初めてなんですけど！

こんな感じで店内を回って、別の店へ日用品を買いに行く頃にはもう、ほとんど気力は残っていなかった。日用品も高かったけど、家具に比べたらどうってことない。

普段の私なら絶対に躊躇するような値段だったけど、家具店で感覚が麻痺しちゃったんだ、絶対。

「さて、一通り当面の生活に必要なものは揃ったので、少し休みましょうか。昼食もまだでしたし、ちょうどいいでしょう。何か食べたいものはありますか？」

「食べたいものですか……あ、美味しいわらび餅が食べたいです！」

「それならいい店を知っています。そこなら町の案内もできますし、楽しみにしててください」

花も見惚れるような笑みを浮かべる須川さんを見るたびに、形勢がたい敗北感に襲われながらハイ、と首を縦に振った。運転手に店の前で止めるように告げ、車の中で正し屋がある町について教えてくれた。

正し屋があるのは、縁町えんぢょうというあまり大きくはない町。

面白いのはたった一つの町に、12ヶ所の公園とそれに通じる社があるらしい。

社に社に通じる道や公園にはその社をつかさどっている神様が好んでいる樹や花が植えられて、毎月、どこかしの公園で祭りが開催されるんだって。

これを『十二月祭り（じゅうにつきまつり）』と呼ぶんだけど、このお祭りは物凄く有名だ。

縁町はお祭りだけじゃなくて、腕のいい職人さんを育成することに力を入れている町だってこともあって、競うように自慢の品を祭りに出店する。だから、いいものが並んで、それが他の街だけじゃなくって海外にまでその評判は轟いている。

「でも、そのお祭りの手伝いって言っても『正し屋』って職人さん、いないですよ？何を手伝うんですか？」

「依頼されているのは神を迎える準備と神卸しまで、ですね。後は呪符や御守りの類を社で売ってもらうくらいでしょうか？」

すみません、神様とお知り合いなんてきてないんですけど。

ひくつと口元がひきつったのを自覚した。

でも、もう就職してしまったものは引き返せないので早く慣れる

ように頑張ろうと思う。

なんか立派なこと言ってるように聞こえるかもしれないけど、ぶっちゃけ私にできるのはこの位しかないんだよね！

こうして、私は目くるめく(?) 非日常と日常の境目へと足を踏み入れちゃったんです。たははー

閉話 カモはネギをしょっていく？（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます！

これで一応、序章みたいなものは終わりです。次から、なんやかんやで癒し成分入れていこうかなあ…等と目論んでいるので、もしよければ暇つぶしにでも読んでやってください。

PS・お気に入り登録してくださっている方がいるらしいことに気付きました。思わず、目薬さしてからもう一回確認しちゃったほど…。

ありがたやゝ、ありがたやゝ。

いや、あの、本当にありがとうございます！がんばるぞー、ふあうとー！

備考と補足があります。

…小説外で説明するの必要がなくなるくらいの文才が欲しい（ボソッ

十二月祭り
じふにがつまつり

正し屋がある縁町は、職人による伝統工芸や日用雑貨の他にも月の最後3日間で催される“月祭り”という祭りが有名。

これらはひと月を無事に過ごせたことに感謝してその月を司っている神様への感謝の気持ちを表す為に昔から行われていた。今現在

はその意味合いが半分、職人たちの腕を競う、もしくは限定品の商
品を売り買いする機会として認識されている。

洒落にならない森林浴（前書き）

正し屋での生活（仕事？）がスタートです。

世の中上手いことばかりではありませんよねー。

洒落にならない森林浴

今一度、^{いまいちど}神様に嫌われるようなことをしたのか聞いてもいいですか。

私が『正し屋本舗』という一風変わった会社に就職したのは、三日前のこと。

三日前に契約書にサインして、二日前に引っ越しを終え、昨日は町の人に挨拶して回った。

正し屋のある縁町は、古き良き日本と現代の技術をうまく組み合わせた風情ある町として有名なのは日本国民なら誰もが知っている。

でも、聞くと実際に見るとのではやっぱり違う。

職人さんの町だって聞いてたから、イメージとしては怖い顔の職人さんだらけで緊張感にあふれてる筈だ、と思っただけ……凄く優しくかったり、気持ちのいい人だらけだった。

仕事をしてる時はイメージ通りの顔になるんだけど、仕事をしてない時は話しかけやすいおじさんだったりおじいちゃんだったりする。お店を仕切っている奥さんは、気前のいいお母さんみたいな感じで、すつごく買い物しやすいそうだったんだよね。

食べ物も美味しいし、景色は綺麗だし、文句なんてあるはずない。……甘味処も多いもんね。

で、だ。

本来なら、今この時間は確実に正し屋で仕事をしている筈だった。

整理して欲しい書類があるっていったし、その為にわざわざ最新のパソコンまで買ったから、てっきり初仕事は書類の整理とデータ入力だと思ってたのに。

「研修するにしたって、森はないとおもいまーす」

なんかもー……笑うしかない。

ご飯を食べた後、出かけるから車に乗るように言われて車に乗ったまでは覚えてる。

で、気づいたら見覚えのない森の中にいた。しかも一人ぼっちで。なんだこれ。

見覚えがないのは途中で爆睡した私が悪いんだけど、お腹はいっぱいな上に、隣から優しい感じの美声で「時間がかかりますから、眠っていても構いませんよ」なんて言われたら即寝落ちだと思う。

一人寂しく、森の中で小さな主張を試みたけど、やっぱり何の返事も突っ込みも帰ってこなかった。

うう…虚しい。せめて友達と一緒になら豪快かつ華麗に突っ込んでくれるのに!!

「にしても、なんで森なんだろう？事故ったって訳じゃなさそうだしなあ」

だって、事故なら近くに車が転がってたり、血痕的なものがあってもおかしくない。

それに事故るなら大体は崖とかに気付かなくてバーンっ！ってなると思うんだけど勿論、崖なんてない。

ちよつとした溝？とか段差みたいなものはあるんだけど、それで事故るとは思えなかった。

だって、木が生い茂ってる所為で車が通れるような幅がない。

立ち上がって周りを見渡してみたけど、湿ったような土と苔の生えた太い木が無数に生えているだけだった。

地面に倒れてる木もあるんだけど、座る気にはなれない。

まだ日中なのに殆ど陽の光が差し込まない所為で、カビとか生えてそうなんだよね。

座った瞬間にぬめつとして、つるつといったらやだし。

「て、うわああ？！なんでこんなところに木が……れ？木じゃない」

何かに躓いて、どうにか転ばずに済んでほっと胸をなでおろした私の視界に飛び込んできたのは、初の人工物。

頑丈な作りで、なんだか沢山お菓子が入りそうな登山用リュックサック。

誰のだー？落し物ですよー！なんて叫んでみたけど、当たり前のように返事はなかったから、中身をちょーっと思わせてもらうことにした。

「なんか生きるのに必要なものがいっぱい入ってる……って、この高そうな封筒！須川さんの手紙だ！」

私の中ではもう、高そうなもの〃大体須川さんの仕業っていう方
程式が完成している。

一緒に買い物するには悟りが必要なんだよね。

いそいそと手紙をあけて薄暗い森の中で読み上げる。

普通なら声に出して読んだりしないんだけど、声でも出さないとや
ってらんないんだよ。察して欲しい。

「むー、なにになに？　」 優君へ　突然ですが、この森を自力
で抜けていただきます。用意したのは水と方位磁石（特別製なので
なくさないように。森を出られなくなりますよ）、地図と食糧、あ
とは携帯用の図鑑が2冊、携帯鍋、ナイフ、御守りと懐中電灯です。
火をつけるマツチも入っていますが、山火事にならないように後処
理はしっかりしてください。貴女なら多分、恐らく、八〇%程度は
大丈夫だと思いますが十分気を付けるようにして下さいね。健闘を
祈っています　　P S . 到着地点は食事が美味しいことで有名な
旅館です。甘味も用意しておくので頑張ってくださいね　　」　　って、
な、なんか突っ込みどころ満載過ぎて、突っ込む気力がまるでおき
ないんですけど」

ちらつとカバンの中身を確認したけど、確かに手紙の内容通りのモノが入っていた。

その他に、よくよく調べてみるとリュックには寝袋や毛布も括り付けられてるし、着替えも2着はいたから物凄く困るってことはない。地図で確認したら川沿いになんとなーく歩いていけば大丈夫っぽいし、川さえ見つければこっちのものなんだよね。

有難いことに、今いる現在地のとこに印もある。

西とか東とか北とか南とかって地図で見てもさっぱり分かんないけど、方位磁石があるし……大丈夫、だよな？

あ、でも結局ここがどの辺の森なのかさっぱりわかんないままじやね？なんて気づいたのは五分後でした。

洒落にならない森林浴（後書き）

やっとアップできたー！！

み、短いけどいい…よね。うん、だって章の始まりだし！

うう、一日に1話更新を目標にしてるんですけど…執筆速度って上がらないモノですねえ（遠い目

なにはともあれ、ここまで読んでくださってありがとうございます！

洒落にならない森林探索（前書き）

森と海なら、必要最低限の装備で生きていけると思う。

食べ物以外の外ならいっぱいあるしね！おすすめは秋と春。
調理いらなのは圧倒的に秋。夏は蚊がいそうだからマジ勘弁。

洒落にならない森林探索

どうやら私は、大変な場所に不法投棄されたようです。

クレーターみたいな場所から脱出した私は、とりあえず、色々考えた。

最終目標は、旅館で食べる美味しい甘味。
とりあえずの目標は川を見つけること、川が見つかったら寝やすそうな場所を確保することだ。

あと、できるだけ食料も確保したい。

食料確保っていつても、食べられそうな木の実がとれる木はなさそうだし、山菜も食用野草もなさそうだから川で魚を捕まえるしかない。薦みたいなのがあるからそれで罾を作った方がよさそう。

なんで私が食べられそうな山の幸を知っているのかといえば、私が田舎に住んでいたから。

いや、田舎に住んできると娯楽が少ないからついつい、こー、山とか川で色々採取するのが楽しくて楽しくて。山菜とり、秋の果物狩り（山ぶどうとか栗とかね）、キノコ狩りなどなど、ホントに食べられるものと食べられないモノ、ついでに現代社会には到底必要ないよーなサバイバル術が自然に身についたわけです。あんまり嬉しくないけど、有難い。

「森の中なのに、なんでこんなにマイナスイオンを放出することを放棄してるのさ」

大体、変だと思っただよね。

私の知ってる森は、ここと同じくらい木が沢山生えてても、陽の光が差し込んでた。

鳥の声も、虫の鳴き声も、木の葉がこすれあつて出す心地い音も…

「（ここには、ない）」

それだけじゃなくて、この森は他の森とは“根本的なもの”が違つてるような気がする。

一体何が違うんだらうと歩きながら考えた。幸い、時間だけはたくさんあつたから。

歩いて、歩いて……気まぐれに携帯で時間を確認したらスタート地点から2時間近く歩いていた。

水の流れる音はまだ聞こえない。

耳が拾う音といえば、枯葉の上を歩く私の足音や自分の呼吸音くらい。

足を止めると、しいん、と耳が痛くなるくらいの静寂に包まれるのが嫌で私は五分だけ近くにあつた岩に腰を下ろして休んだ後、また地図と方位磁石を頼りに歩き始める。

山歩きには慣れてるからまだ疲れてはいないけど、少なくとも日

が沈む前に川を見つけない。

雨が降ってる時に、水の近くにいるのは危ないけどそうでない限りは川辺で野宿するのが一番いいって教わった。理由はいざという時の飲み水が確保できるからだ。

それに、きれいな川だったら魚も捕れるし、水辺でとれる食用野草は結構多い。

「あ………そ、つか。変だ変だっと思ってたけど、生きてないんだ、この森」

いろんなものが、生きてない。

厳密に言えば森 …… 木とか森を構成してる一つ一つ自体は生きてる。

例えば、土の中の微生物とか大嫌いなミミズとかね？確認してないけど、きっといるはず。

あー、うーん、上手に言えないけど、生き生きしたマイナスイオン溢れる森じゃないのは確かだ。

できるだけ長居はしたくないのでキリキリ歩こうと思います。
ええ、キリキリ歩きますとも。

決意を固めて歩くこと三時間、時刻は午後3時30分。

ご飯を食べるのを我慢して無心で歩いた甲斐があつて、うつすら水の音が聞こえてきた。

ちなみにご飯（カロリー〇イト、チョコ味！結構好きなんだよね）は一日2本。それで計算すると12日は持つ計算だ。本当はもっと食べたいけど、何かあるかわからないし、無事にたどり着けるかどうかわからないから余裕をもつて置くにこしたことはない。

でも、やっぱりお腹は空くから、飴玉を一口に入れてる。レモン味です、うま〜。

ちなみに飴玉とチョコレートが食料の中に入っていました。流石です。遭難したとき、これらがあるのとないのとじゃ生存率がごばーっと違つてテレビの特集でいったし間違いないと思う。

「なーんか、疲れてるせいかもしれないけど……歩けば歩くほど、空気がでろろんってなってるような」

つまりは、山を登れば登るほどに、なんだか凄く空気が澱んでい

く気がする。

暗さは森の中で目が覚めた時よりも深まって、空を仰いでも生い茂ったよくわからない木の葉っぱで殆ど空は見えなかった。木ばっかりだし、似たような風景ばかりだから方向感覚もおかしくなってきたて、自分がどこを歩いてるのかわからなくなることが結構ある。

幸い、方位磁石と地図があるからいいんだけど、もしこれで何も持たずにはいったら完全に迷子だ。

食べ物になりそうなものも一切ないし、雨が降らなければ水の確保も難しい。

いや、そもそもこんな暗い森の中に入ろうって人間の気がしれないよ。

私みたいに不法投棄されたならともかく。

文句と森に関する疑問をぶつぶつ口にしながら（だって寂しいんだもん！なーんにもないんだよ？！）、水音がする方へ歩いくこと30分、突然、なんの前触れもなく黒い、影が遠くの方で揺れた気がした。

進行方向だからこのままいけばよく見えるはずんだけど……なんだか、凄く、近づきたくない。

近づけば近づくほど、シルエットがはっきりしてきて、ものすごく、嫌な予感しかない。

太い木の枝から垂れ下がるひも状のモノの先端には大きな、そう
人の、形をした黒いモノが音もなく、ぶら下がっ
てる。

頭では見えてるものが人だったもののはわかってるんだけど、そ
う簡単に認めたくなくてこの目で確かめるまでは前方の黒いモノに
ついては深く考えないことにした。

黒い影に近くづくごとに、変な汗が滲み出てくる。

知らないうちに体をできるだけ縮めて、影から身を守るような姿勢
で歩いていることにふと気づく。

「（もうこれ以上、近寄りたくないけど……でも、知らないといけ
ない気が、する）」

歩きながら、ぼんやりとこの森について考えてたんだけど、たぶ
ん…この森は“裏・雲仙岳^{うんせんだけ} 樹海^{じゅかい}”だと思う。

正し屋がある縁町から車で3時間くらいかかる場所に“雲仙岳”
って名前の山があった筈だ。

この山は日本の絶景50選に選ばれるくらい有名だから流石の私で

も知ってたんだよね。

この山、実は双子山になってるんだけど……正面にある雲仙岳のすぐ後ろにほとんど同じ大きさの、でも、雰囲気が真逆の山がある。その山は通称“裏・雲仙岳 樹海”っていわれていて、自殺の名所中の名所としてある意味、雲仙岳よりも有名なんだけど……。

「す、須川さあ……な、なんでこんなところに置いてくのー?! うう、黒いのあれだよ、絶対ぜったいアレだよな?! こんなところで野宿するのほんとに勘弁して欲しいんですけど」

裏・層仙岳はときどき、テレビで取り上げられる。

勿論、ニュースでもあるけど主に心霊番組で。

自殺の名所って基本的に、そーゆー特集で取り上げられることが多いんだけど、この山に限って必ず何かの映像や写真が撮れてるみたい。

「は、ははは……これはあれだよ、確実にお化けいるパターンだよ。間違いないよね」

自殺の名所〓仏さんごろごろ。

超有名心霊スポット〓お化けさんごろごろ。

うう、今日の夜は寝ないほうがいいかな？でも歩きっぱなしだから絶対寝ちゃう。

「（朝まで熟睡できればいいけど、金縛りとか初体験しちゃったらどうしよう！？須川さんに呪文的なもの聞いておくべきだった…？あ、でも確かバッグの中に御守りが入ってた……ってやっぱりどー考えても心霊スポット決定だ）」

がつくりと肩を落として頂垂れたところで助けてくれる人なんてどこにもいないんだけど、落ち込むくらいは自由にさせてほしい。

半泣きになりながら鞆の中から御守りを取り出して、手首にしっかり結びつける。

その上で落とさないように握りしめて、じりじりと黒い物体と間合いを取りながら前進していくことを決めた。女は度胸だ！根性だ！

よ、よし！須川さんからの御守りだから絶対効果はある！……箒。

「って、あ、あれ？あの黒っこの何処どこいったんだろ……？まさか移動した、なん、て、ことはないよね……？！」

恐る恐る、背後を確かめる。

ゆーっくりゆうーっくり振り返ってみたけど、何もなくてホッとした。心底ほっとしたよ！

で、今度は正面を向くときも細心の警戒心を持って振り向いた。

だって、よくあるパターンでしょ？後ろ向いた時は何もいないんだけど正面向いたらドーン！ってパターン。あれはないわー、ほんとないわー！！

「ハッ？！も、ももももしかしたら、さっきのって死体じゃなくて……えーと、えーと」

じわじわと物凄い汗が全身から吹き出てきた。

あ、あれー。なんかすごい寒いんですけど。

御守りを持つ手が震える、ついでに足も思い出したみたいにガクブルしてきた。

「や、やっぱり、お、おおおおお、おば、お化け……？」

うひょああああああ、と奇声が体の底から吹き出て声になった。

声が出るとようやく生まれたての小鹿的なことになってた足も動き始める。

方位磁石と地図を左手に握りしめ、右手には御守りをがつつりもったまま、お化け（仮）がいた場所から逃走を図る。

好き好んでお化けのいるところにしようとする人間の気がしれないよ！！

全力疾走して、走りに走って、筋力の限界を悟ったところで私はそのまま崩れ落ちた。

服が汚れるとかもーどーでもいい。

息がしにくいどころか、息を吸い込む度に肺が「つかれたよー！はたらかせんなよー！」って悲鳴を上げてる。つまり、痛い。息苦しいんじゃないくて、痛い。こればかりは運動が得意な人にはわかるまい。

「っゴホ…げぼッ、ぜひゅー……う、運動…ぜひゅー……不足、だ」

深呼吸を繰り返して、ようやく状況判断ができるまで回復した。
冷や汗じゃないある意味健康的な汗をぬぐって、よろけつつも立ち
上がって、現在地を見渡す。

相変わらず木はあるけど、さっき私を取り囲んだ木とは少し、
雰囲気が違う。

それに土も少しだけ砂っぽいし、小石が多く混じってる。

なにより、水の音が近くから聞こえてくることを考えると、ほんの
数m先に川がある筈だ。

「な、何とか今日中に見つかった……ええと、次は寢床探して、乾

燥した木拾って、ついでに蔦で罫をつく……あ、でもその前に魚が住んでそうな川かどうか確認しないと。あーもー、ほんとよかった」

実は、今日中に川が見つかるかどうかわからなかったんだよね。だからすごく嬉しかったんだけど……この時の私は、すっかり忘れていた。

私がいるのが、かなり特殊だったことも、ついさっき見たモノのことも。

たぶん、これから私にとっての本当の始まり。

洒落にならない森林探索（後書き）

前のが少し短かったのでちょっと長め？に…と思ったんですが、書いてる最中は長く感じて、いざ読むと短い罷w

これから少しずつホラー要素がはいつてきます、おそらく。

ここまで読んでくださってありがとうございます！

次もまた、頑張りますのでよければお付き合いくださいませ。

P S ・お気に入りの件数が1件から2件になっていることに気付きました。

ありがたやゝ、ありがたやゝ。すかさず拝み倒したのは言うまでもないと思います。うう、うれしすぎる！がんばるべー！！

洒落にならない野宿 1 (前書き)

最近、美味しいモノに飢えています。

美味しいモノが食べたいのに、何を食べたいのか出てこない……く
ーちーおーしーやー。

洒落にならない野宿 1

この森の、夜を恐れるのは生き物として当たり前の行動だ。

目の前に広がる川を見た瞬間に、知らないうちに溜まっていたらしい疲労感が押し寄せてきた。

気が緩んだ瞬間に、疲労感が容赦なく襲ってくるのはわかっているけど、どーせなら寝るときに襲ってきてほしかったよ。今日はまだやらなきゃいけないことがいっぱいあるのに…。

現在進行形で私は、今現在川沿いを歩いています。
勿論、上流に向かって。

そうそう、肝心の川なんだけど幸いにも綺麗で、そのまま飲んで
も問題はなさそうだった。

ただし、いくら見た目が綺麗でも飲むときは煮沸消毒必須。
生水をそのまま飲むなんて行動は最終手段です。ええ、最終手段ですとも。

「流石、だなあ。川だろーと何処だろーと関係なしに空気が重苦しい。普通、どんないけ好かない森だって常に水が流れてるところは
大体清々しい空気だって相場は決まってるのに」

見る限りではごくごく普通の川だ。
幅は大体6〜7m位で川辺は浅いけど、中央に行けばいくほどそれ
なりの深さがあるんだろう。

この位の川なら1〜2 m程度の深さだろうけど。

川辺には大小さまざまな小石と上流から流れてきたらしい枝が転がってるくらいで、ゴミがない分中々にみられる光景ではある。でもやっぱり、好きじゃないモノは好きじゃない。

川から少し離れたところを歩きながら今夜の寝床を探す。

言っておくけど、森の中で野宿はしたことない。いや、町の中でも野宿はしたことないんだけど。

寝床の条件としてまず、優先したいことがあった。

「雨風以前に、このどんより空気が少しでも薄らつてるところじゃないと。絶対怖い夢見る」

いくら神に二物も三物も与えられた須川さんからの御守りがあるといっても、やっぱり不安要素は極力減らすに限る。

キョロキョロと落ち着きなく周囲を見渡しながら、ときどき遠くの方に黒い何かが見えることがあったが綺麗さっぱり見なかったことにして歩みを進める。ぶら下がってるのが森の奥の方に5〜6体見えた時は、さすがにゾツとしたけどやっぱり見なかったことにした。

目があるかどうかはわからないけど、目なんかあった日には色々
終わりだともう。

万が一を考えてこそこそ歩きながら、半ば必死に探し始めて数十
分。

川に近いからわかる、空の変化にうつそり目を細める。

まだ夏だから5時や6時では真っ暗にならないけど、流石に少しず
つ明るさを欠きはじめている。

少し焦り始めたころ、今まで見てきたものとは少し違う景観にな
ったことに気付いた。

樹や苔と小石ばかりだったのが、今じゃ木と苔と大岩小岩中岩に
変わったなーと思っていたら、壁のような、岩肌剥き出しの崖が現
れた。

岩がゴロゴロしてたのは間違いなく、この崖から落ちてきたものだ
ろう。

…とつさに、落石注意の看板がないかどうか確認した。

なかったけどね!!

歩いてる途中でみたのは薄汚れてなんか赤茶色の何かが付いたのだ
けだ。

文字は辛うじて読めたよ？読んだ瞬間に、読むんじゃなかったって
思ったけどね！

そつと元あった場所に看板を伏せておいたのは言うまでもない。

お蔭でこの森はインスピレーション通り（？）自殺の名所だって
確信したけど。

いらない、いらないよ！そんな確信ッ！！

「あ、でもなんか良さそうな所みつけ。洞窟、なのかな……？」

崖、といつてもそこは石をくりぬいた用な場所を見つけた。

耳を澄ませば水の流れる音が聞こえてくる。
川のある方へは10m程度んだけど、木があるせいで川自体は見えない。

「立地条件は優良！さて、問題はこの洞窟の中、だよー……な、
中に黒いのとか仏さんとかがゴロゴロしてないことを切に願おう。
あ、あと熊とかいないといいな」

持っていた地図と方位磁石を一旦、背負ったバッグにしまいこん

でから、ズボンのベルト部分にひっかけて懐中電灯を手取る。反対側の手には相変わらず御守りを握りしめていますとも。黒いのに遭遇しないと言い切れないからね！

「よし、お、おじゃまします」

こそこそと体を縮めて、洞窟の中に潜入する。
でも、洞窟に足を踏み入れた瞬間、拍子抜けした。

「洞窟っていうよりは“一人用かまくら”って感じ、かも」

手を伸ばして少し余裕があるくらいの広さだけど、雨風は十分凌げるし、入り口が凄く大きいわけじゃないから熊は入ってこれないだろう。

こーゆーときばかりは背が小さくてよかったなーと思う。
人間もいつか伸縮自在になれば素晴らしいのに、なんて呟きながら、天井やら壁やら地面やらを照らして確認を続ける。

変なものはなく、かえって過ごしやすそうだった。
崖というよりも石に似た質感の壁や天井にあたる部分は特に汚れて

いる訳でもないし、返り血だとかそれに類するものは見当たらない。地面だって掘り起こしたような跡がなければ、死体も白骨も動物の死骸も見当たらなかった。

「あんまり澱んだ感じもしないし、ここにしようかな。あつたかそうだし、ギリギリだけど足も伸ばせそうだし上々だね。この森にあるんじゃないかったら絶好の秘密基地になるのになあ」

もつたいたいもつたいたい。

そんなことを呟きながら、歩きながら集めていた枯れ木や折れた枝を寢床に置いてから近くを探索することにした。

川の水を携帯用の小鍋にいれる為に川辺へ向かう。

途中で蔦^{つた}を取って、編み編みしながら川辺周辺を見渡す。

まだ明るいけど、山の天気は変わりやすいので、さっさと編んでしまうに限る。

ちなみに、編んだ蔦は石などで作った囲いの中に仕掛けておくのだ。

上手くいけば魚が捕れる。うまくいかなければ何も取れないけど、明るくなったら沢蟹^{さわがに}でも探そうと思う。沢蟹、お味噌汁にすると美味しいんだよ！

あ、調味料も少しだけバッグに入ってた。よく見てなかったから気づかなかっただけ、ほかに簡単な救急セットもあったから

1 週間はもつ筈。

ふ。なんだか本格的なアウトドアでもやってる気分だよ。

「目的地にたどり着くところに野生の女になってたらどうしよう。とりあえず朝一番に魚の有無を確かめて、お湯沸かしたらタオルで体拭こう……髪も洗いたいけど……水が冷たすぎなかったら最悪川に特攻だな。人もいなさそーだし、すっぱんぼんになっても恥ずかしいところがいいよね！」

流石に人がいたら一瞬悩むかもしれないけど、人がいないなら悩む必要もない。

バツと脱いで、じゃばつと水浴びだ！

川で水浴びといっても深いところまで行く気はさらさらない。

深いところに行けばいくほど足を取られやすくなるからだ。

だから浅瀬から少しだけ進んだ、でも中央に近づきすぎない場所でする。

罾を完成させて、それを設置したら素早く川から上がって水をくむ。

水をこぼさないように注意しながら、今日の寢床へ戻り鍋にふたをしておく。

虫が入ったら嫌だからね。

「枝、もうちょっと拾ってこようかな。川はいいとして、このあたりも気になるし……黒いの、いないよね？」

安全は確かめておくに越したことはない。

寝ている間に取り囲まれてました、残念！とかつていう状況だけは断固しても避けたいのです。

某有名ホラー映画の髪の長い女性みたいなのと寝起き一発で遭遇したら昇天できる自信がある。

……かといって、須川さんみたいな美形の顔があるのも勘弁だけど。

普通の起床をすべく、私は周囲探索を決めた。

暗くなったら嫌なので、歩く範囲は狭くする。

念の為にしっかり地図と方位磁石、非常食が入ったカバンを持っていく。

最悪、戻れなくなってもこれさえあれば何とかなるからだ。

懐中電灯は装備済みだし、御守りに至っては肌身離さず握りしめている。

「んー、とりあえずは脅威になりそうなものはない、かな？」

相変わらず、どんよりした空気だけど他のところよりはマシだ。

考えたところで答えは出ないんだけど気になる。

川の近くだから、って訳じゃないと思うんだよね。

水自体は綺麗でも空気が澄んでるって訳じゃなかったし。

本当に変な所だなー、なんて考えながら乾燥した枝を拾いあつめる。

ついでに、お茶になりそうな野草を見つけたのでそれも摘んでおい

た。

乾燥させるのも悪くないけど、煮出せば十分お茶として飲める。

こついう知識の源は近所のお婆ちゃんだったり、お爺ちゃんだったりするんだけど……こんなところで役に立つとは思わなかったよ。

「お。これ確か擦り傷とか切り傷に効くって草だ。ちょっと摘んでいこうかなー。ダメもとで、治らなかつたらそれはそれだ……し？」

木の根元に偶然見つけた薬草を摘もうと近づいたまでは良かった。そんでもって、屈んで手を伸ばしたのもまだまだ問題なかったと思うんだ。

ちよつとアレだったのは……偶然目についた薬草のすぐ傍に見慣れた、でも見慣れない生き物が転がっていたこと。

「す……雀って、美味しいんだっけ」

盛大に混乱していた私の口から出たのは、かなり、色々間違った一言だ。

お腹は空いてたけど食べる気はなかったよ！ほんとだよ！！
ただ何となく、近所に住んでたお爺ちゃんやお婆ちゃん方がもこもこでふわふわな寒雀かんすずめを見て懐かしそうに話してたのを思い出しただけで！！

遠くから、もしくはそれなりに近くからは見た覚えのある、庶民的かつ愛らしい鳥を私はマジマジと観察した。

木の根元に転がった、両掌に収まるサイズの鳥は雀とよばれる種類に間違いない。

ただ、ふかふかの羽毛と艶やかな羽が赤茶色で汚れていた。

私から見て右側の羽が広がって、何かにかまれたような生々しい傷跡がある以外は普通の雀だ。

「すずめー……こんなになってどうしたの。お前さん、ふつー空飛んでるから普通はがぶつとやられないでしょーに」

そつと小さな体を手で掴んで、傷に触らないように地面から持ち上げる。

持ち上げるとほんのり温かった。

丁度薬草も見つけたし、薬草すり潰したやつを塗って包帯巻けば完成だ。

効くのかどうかはわからないけど、何もしないよりはいいと思うんだよね。

薬草を摘んで、しっかり枝を鞆に結び付けてから雀を両手で持つ。御守りは手首に結び付けてあるから問題なし。

「この森で生きて生物にあったの、すずめーが初めてかも」

よしよし、と頭を親指で軽く撫でてから駆け足で帰路につく。

怪我をして弱ってるすずめーには悪いけど、正直、かなり救われた。掌から伝わってくる温かさは、気味の悪い森に一人ぼっちで不法投棄された私にとって神様に近い。

変な黒いのはいるし、鳥の鳴き声すら聞こえない、自殺の名所で動物とはいえ、いるのといないのでは雲泥の差だ。

無事に元気になってくれるといいな、と心の底から思った私はまだ、衝撃的な事実に気付かない。

.

洒落にならない野宿 1（後書き）

すずめー、を飼いたいと冬にもこもこしたのを見るたびに思います。
……ときどき、雀みると焼き鳥を思い出す。じゅるり

ここまで読んでくださってありがとうございます！

洒落にならない野宿 2（前書き）

そういえば、数年前、ホラー小説を書いて半ば憑りつかれていたことがありました。懐かしいなあ…。

原因は多分、ネットで見まくっていた心靈写真及び映像。靈感？そんなものの微塵もありません。

洒落にならない野宿 2

注意：ちよつと、生々しい（流血的な意味で）表現があるので苦手な方は から下を読まないことをお勧めします。大丈夫だよーん、とおっしゃる方はずずいーっとお読みください。

何かが争い、食い合う音を聞きながら堕ちていく…

もともと、辛気臭くて陽の光が届きにくい森だったのに、どーしてこういう時だけ色がつくんだと文句を言いたかった。

だって、お日様が真上に上っても殆ど光を取り入れなかったのに、沈みかけて異様に赤い夕陽だけは取り込むってありえないと思う。いや、あつても私は許したくないね！凄く気味悪いから。

薄暗かった森は、燃えるような赤に近い橙色に染められ、黒みを帯びた木や枝、葉……土に至るまで、まるで血液をばら撒いて乾燥させたような色になっている。

わかり易いのは固まりかけた血、つてところだ。

ほら、うっかり包丁で切ったりとかカサブタが生乾きの時の色。

それが濃淡の違いこそあれど、容赦なく一面に広がってるんだから不気味だと思う。実際、不気味だし。

「すずめー……おまえもこんな物騒かつ不気味極まりない森の中で大変だったね。私と違って空飛べるから自由自在なんだろうけど、鈍くさかったからカプツってやられちゃったんでしょ？大丈夫だよ、私、生きた鳥は捌いたことないし、捌く予定もないから安心してね」

サラサラの羽毛（まさしく羽毛だ。うん）を指で撫でながら、私は一生懸命話しかける。

正直、自分で何を言ってるのかわからないけど、こんな音のない森で弱つてくのは自分だったら勘弁してほしいもん。多少、なんか色々よくわからなくても音はあった方がいいと思うんだよね！

両手でしっかりと雀の体を包んで、私は足早に夕日に照らされた道なき道を歩く。

少ししか歩いていなかったこともあって、私は比較的早く寢床と決めた場所にたどり着いた。

「……なんだろう、何の変哲もない洞窟もどきなのに凄くほっとする」

やっぱり、すっぱり収まる程度に狭くて寝るのに適した暗さだか

ら？

首をかしげつつ、そつと雀を入り口付近、一番やわらかそうな土の上に置いて、そそくさと寝袋を広げた。

勿論、というか寝袋を広げる下には川辺に行く途中に集めた綺麗な落ち葉や葉っぱを敷いてある。

高そうな寝袋を好き好んで汚すなんて庶民代表の私にはできないんだ。

クリーニング代とか結構高いしもったいないもんねー。

寝袋を広げて、その横に鞆を置いてからタオルを敷き、ペットボトルとつい先ほどむしった薬草を用意する。適度な大きさの石を見つけたので、鍋に汲んでおいた川の水を少し使って汚れを流す。

それから適当な石を同じように綺麗にしてからゴリゴリ薬草をすり潰せば一応完成だ。

「うわ、なんか薬っぱい匂い！昔の人の知恵ってすごいなあ……私なんかよりも頭使ってるんだろっなあ」

教えてくれた近所のおじいちゃんおばあちゃんに感謝しつつ、肝心の雀を土の上からそつと持ち上げる。

よしよし、まだ生きてるな。偉い偉い。

親指の腹で頭をなでなでしてから、怪我をしている所にペットボトルの水をかけて傷口をきれいにする。

本当は飲み水のことを考えると川の水を使いたかったんだけど、煮沸消毒もしてないのであきらめた。

傷にばい菌が入って飛べなくなったら、雀だって悲しいだろうし。

傷といっても、雀の羽だから、そんなに広範囲じゃないから直ぐに傷口は綺麗になった。

「えーと、このできたてほやほやのすり潰した薬草をぺちよつと乗つけて…」
なんか、鶏肉に香草練りこんでるみたいな気分だな

「…
んでもって、包帯でくるくるくる…」

見よう見まねで包帯を巻いて、救急セットの中に入っていた小さなはさみで包帯を切り、ほどけないように結べば完成だ！

痛々しい傷跡は白くてやわらかい包帯の下に隠れたし、出血もあらかた止まってたから後はこの雀の根性に掛けるしかない。

よしよしと仕上げに頭を軽く撫でて、綺麗なタオルの上に乗せる。タオルは3枚あったから2枚は洗って使いまわせばいいし。

「にしても、真っ赤だなあ……ここが自殺の名所じゃなかったら素直に感動もできるのに」

そもそも、だ。

私に靈感なんて特殊なものはないと思う。

今までお化けを見たこともなければ、金縛りにあったことだってない。

嫌だなんて思う場所があったけど、周りの人も同じように感じてたし私が特別って訳じゃなかった。

黒いのが視えたのは、間違いなくこの森が特殊な場所だからだとおもう。

ほら、よく怪談とか番組の体験談再現みたいなのである心霊スポットにいった不思議な体験をしたり怖い思いをしたりする、アレだ。

あれって、霊能者の人とかが言うには“たまたま”お化けとかと波長があって、うっかり視えちゃったのよってな具合らしいし、今回見えたのはそんな感じのものだと私信じてる。

「超能力とか霊能力とかあったらいいなあ、とは思うけどソレはソレ、これはこれ。実際に視えちゃったうのは嫌だなー……お目覚め一発、怖いお化けのドアップとか無理だもん、ほんとに。トイレの上やら下から髪の毛ぶわあああああ！みたいなのも無理。すっごく無理」

ないない、と思わず首を横に振った。

盛大な独り言だけど、ほぼ一日、超有名な心霊スポットかつ自殺の名所に放置されれば独り言や愚痴の一つや二つや三つは言いたくなる。

幽霊怖い、的なことをボヤキながらマッチを取り出してよく乾いた枯葉を乾いた枝の上に置いていく。

それからマッチで火をつけて、フーフーしながら火が消えない程度に大きくなるのを待った。

キャンプファイヤーとかは小学生の時にやったし、キャンプの経験もあるけど新聞紙やら燃えやすい紙、燃料を駆使してたから、枝と落ち葉だけっていうのは初めての試みだった。

最悪、タオルを小さく切って燃やすことも考えたんだけど……やってみるもんだなあ……。

そうそう、マッチって偉大だ。

火打石とか棒を擦り合わせて火を熾さなきゃいけないなんてことに

なつてたら確実に色々諦めてたもん。

「このお茶、結構おいしいかも。緑茶よりのハーブティーみたいな感じ？色も綺麗だし、うん。いけるいける。あー……きつと練りきりのお供に最適だ。無事にこの森から出られたらこのお茶で練りきり食べよう。そうしよう、もうこの荒んだハートを癒せるのは練りきりさんしかない」

お茶と共に今日の食事、カロリーメイトをゆっくり時間をかけて食べた。

その後、できることは寝ることだけ。

つまるとかつまらないとか以前にもものすごく疲れてたらしく、寝袋の上でごろんと転がれば数分で眠気に襲われた。

ぼーっとしながら、雀の様子を確認して、あくびと共に目を閉じる。

小さな洞窟の中から視えた景色は、闇に染まっていた。

光は勿論、虫の鳴く声も聞こえなくて、夜さえも溶けてしまっているような暗闇。

寢床にしている洞窟の中は、たき火のお蔭で僅かに明るい。

だからこそ、私は眠りに落ちるまで“本当に”恐怖するということを知らずにいた。

私はどちらかといえば、よく夢を見て、夢を見たことを覚えて
いる方だった。

内容はいつも空想と創造、もしくは願望が私の中で膨らませたり
縮ませたりしたもの。

大体カラーで、声もついてて味もするし、痛みのようなものも感じ
られた。

流石にコントロールすることは難しかったけど、小さなころはコントロールもできたから、寝るのが楽しくて楽しくて！……その所為で、友達からは「優ちゃんは良く寝るね」と言われ、大人からは「寝る子は育つ」というからきつと大きくなるわね」なんて言われた。

言っておくけど、縦にはあまり育たなかった。横には……うん、もう何も言わない。

とにかく、寝るのが好きだった私はそれなりに夢のバリエーションだって知ってる。

怖い夢だつて、見た。

誰かが死んだり、殺しあっていたり、憎み合っていたり、お化けがでたり、幽霊に襲われたり、呪われていたり、なにもなくなっていたり。

でも、それはあくまでも夢でしかない。

（な、に……？これ。こんなの、しらない）

夢の中は、真っ暗だった。

真っ暗ではあったけれど、そこには音と温度がある。

これは別に珍しいことじゃない。

普段よく見る部類には入らないけど、声や温度だけの夢だってあったから。

（これは…

だれ？）

強烈な、感情が私に流れ込んでくる。

夢の中の中心はいつも“私自身”なのに、この日の夢は違った。

“私”の見る「私自身の夢」なのに、“私以外”の「私じゃない誰か」の夢をみている。

暗闇の中で、たくさんの声が聞こえてくる。

どれもこれも「苦しい」とか「悲しい」とか「辛い」だとか、拳句の果てには「憎い」「許さない」「殺してやる」「道連れに」などと物騒極まりない色に染まっていく。

そして、最後には 生々しい音と共に噛み砕かれ、嚼られ、引き千切られ……断末魔の叫びと助けを求める声を残して消えていく。

知らない、私の中にも存在するかもしれない……深い感情。

生々しい他人の声や感覚を借りて私はそれらをただ、傍観していた。

正直なところ、「私」には害なんて、ない。

でも、うつん……だからこそ、怖かった。

自分の夢を、自分の頭を、自分の心をじわじわ乗っ取られていくような恐怖。
私が知らない私ですらない、明らかな他人に浸食されていくような感覚は、どうしようもないくらい怖かった。

（醒めて…醒めてっ、醒めろ…ッ！！なにこれ、こんなの知らない！
気持ち悪いッ、醒めろってばっ！！）

何度も何度も呪文みたいに、馬鹿みたいに繰り返した。

その間、ずっと『何か』が“何か”を食らう音だけが響く。

まるでお腹を空かせた動物が夢中で、肉を喰い千切り、骨を噛み砕き、溢れだした血液を舐め、啜る音。

命を、食らいつくす音に私の夢は支配される。

もう、聞こえるのは痛みに呻く生き物だったモノが発する音と、まだ辛うじて繋がっている誰かの必死に助けを乞う、報われない声だけ…

.

洒落にならない野宿 2（後書き）

ここまで目を通していただき、ありがとうございました！
うむむ。ちよっとホラー（ホラーか？）っぽさが出てきたような出てきてないような、微妙な所に突入です。

雀かわいいよ、雀。

洒落にならない野宿 3 (前書き)

目指せ！せくしーしーん！！

と、掲げている時点で多分、自分は痛い人。

洒落にならない野宿 3

私を悪夢から救ってくれたのは、弱い筈の、強い存在。

私の悪夢を終わらせてくれたのは、悲鳴でも恨み辛みの声でも

なかった。

小さな、本当に小っちゃくて、うつすら聞こえただけなんだけど意識するとそれはしっかり私の中に入ってくる。

チチチチチ、という可愛らしい鳴き声は少しずつ、苦痛に満ちた音を消していく。

完全に聞こえなくなったわけじゃないけど……でも、親しみやすいその鳴き声にすっかり泣きそうになる。

夢の中だから、泣くことはなかったけど、でも泣きたいくらいほつとした。

じんわりと体の末端が温まっていく。

いつの間にか、冷たくなっていた指に安心感と血液が巡り始めるのを感じて深く、息を吐いた。

まだ、頭の片隅に悪夢の余韻が残っている。

絶対に普段の生活では聞くことができない沢山の声は頭の奥底で、反芻して安心感や血液と共に全身にばら撒かれていく。

（手…震えてる）

カタカタと震える手をぼーっとしたまま観察していると、小さな

音がした。

たき火の消えた洞窟の中は外と変わらない暗さで、夢の中みたいに真っ暗だった。

濃淡すらない完全な黒い空間に少しずつ、呼吸が浅くなっていく。

そんな中で、聞こえてきた音のは枯葉が擦れ合う、独特の軽い音。

枯葉なら、寝袋の下に敷き詰めてある。

そこから聞こえてきた音なら聞かなかったことにしてすぐに寝ることができなのに、音が聞こえてきたのは明らかに“外”だった。

「ッ……！！」

近づいてくる、そうわかった瞬間に私はあわてて両手で口を押えてた。

私だって、こんなことをしたって相手に息をする音が聞こえなくなるとは思ってない。

音は微かに、でも少しずつ近づいていた。

カサカサと自分の足音を極力消そうとしているような、そんな印象を覚える足取りだった。

私は体をゆっくりゆっくり

音を、たてないように細

心の注意を払って

体を丸めていく。

視線は、外につながる唯一の入り口に固定されたままだ。

視えないのはわかってる。

でも、どうせ目を閉じたところで広がるのは変わらない暗闇なんだから、少しでも相手の隙を見て逃げ出せる用意しておいた方がいい。ガチガチとかみ合わない歯が音を立てているのに気づいて、私は指を歯の間に挟んで音を止めた。

（気づかないで、そのまま、行つて…ッ！！）

お願いだから、と入り口をにらみつける。

鼻の奥がつーんと痛んで、瞳に涙が溜まっていくのがわかったけどそれを拭う余裕がない。

余計な音を立てないように細心の注意を払って、息を殺した。

（あ、れ……？ちょっとま、つて。音が、増えてる…？）

増えている、音に戦慄する私を放置して、音は増えていく。

沢山の音はいたるところから聞こえてきている。

それらが目指すのは、この洞窟なのかもしれないと考えた瞬間、頭の中に不安が一気に噴き出した。

「（これやばいよね！？どーかんがえても私、危ない感じだよね？！たしかにこの洞窟は寝るのにちょうどいいけど、集会と集合地点には向かない！幹事っ、いるならしつかり場所決めくらいしとけっ！幹事がいないならいいだしっぺ！もつとわかり易くていい場所あったでしょ？！なんでよりによってここなの！怖いってば！私が怖がっても出るのは涙と鼻水と奇声くらいだって考えりゃわかるでしょ！私より馬鹿だなーっていわれても知らないんだからね！弁解もフォローもしてあげないんだからっ）」

怖すぎて、なんだかもー腹立ってきたんですけども！

いつの間にか体の震えは止まっていたので啜っていた指を歯の間から外す。

来るなら来い！と八つ当たり気味に入り口をにらみつけていると、足音が一斉に止まった。

「（あ、あれ？も、もしかして私の開き直りが通じた？）」

それはそれでいいんだけど、緊張と不安がじわじわと戻ってきた。戻ってこなくてもいいってば！どっかに帰れ、恐怖心！！ぎゅっと手を握りしめた私の耳を大きな咆哮が突き抜けていった。

「（は……？）」

今のは、なんだ。

あっけにとられて思考を放棄した私の耳に、今度は悲鳴とも絶叫ともつかない声や唸り声、怒号のような音が次々に飛び込んでくる。何かの動物が喧嘩というより死闘を繰り広げているらしい。生々しい音がひっきりなしに聞こえてくる。

いったい、なにがどうして私の寢床の前で決闘なんぞ始めたのかはわからないけど、今のところは安全だ。

敵が自分の目の前にいるんだから、脇役かつ雑草的な私に構ってい

る暇なんて微塵もない筈だし。

よそ見してる間に相手にカプツとやられちゃ堪らないもんね。

最終的に生き残ったのがお腹一杯になってどっかに行ってくれれば
とりあえず、日の目は拝める。

……動物は好きだけど、野生の掟に首を突っ込む度胸も覚悟もない
もんね！

もし外にいるのが犬っぽいだけじゃなくって、熊っぽいのか、
荒ぶった鹿っぽいのか馬っぽいのかだったら間違いなく彼らの
夜食になる。

私はこの森を抜けて、見つけた野草のお茶で美味しい練りきり食べ
るって決めたんだから死ぬわけにはいかない。どうせ死ぬなら美味
しいモノ全部食べて存分にゴロゴロしてお風呂入って、昼寝してる
時にして欲しい。

相変わらず聞こえてくる生々しい争いの音をBGMに、ついさっ
き見てい時のことを思い出した。

「（あの時のって、雀の鳴き声……だよな）」

雀といえば、枕元にいるはずの怪我をした雀くらいしか思い当たる節がない。

っていつても、所詮は夢の話だから枕元の雀が助けてくれた〜なんてお伽噺的展開にはならないのが現実だ。

色々想像力豊かな私でも現実と夢の違いくらいは認識できる！

……ときどき、寝ぼけて美味しいものと枕を食べちゃうことがあるけど。

「（でも、仕方ないと思うんだ。だって両手で抱えられるくらい大きくて美味しそうな豆大福が目の前にあるんだよ?! 食べないなんて人間じゃないよ）」

他にも食べ損ねた美味しいモノシリーズについて考えを巡らせていた私の耳に、再び雄叫びが飛び込んできた。

反射的に反応したことで我に返る。

いや、すっかり忘れてたけど外ではサバイバルな戦いが……って、妄想してる場合じゃなかった！

慌てて意識を“外”に向けると、唸り声も悲鳴も、物音もなにもしなくなっていた。

何もない、暗闇と重い静寂が広がっているだけでさっきまで“何か”がいた形跡も、きれいさっぱり消えている。

「……………ねよう」

多分、今日はもう何も起こらない。

外に出て確かめるといふのは、ちょっとした自暴自棄。言い方を変えれば、自殺行為。

そもそも、明かりが全くないから何があっても真っ暗で視えないから、朝にならないと何があったのかわからない。……朝になっても何があったのかわからない可能性がものすごくあるけど、それはそれだ。

「おやすみー」

あつたことも見たこともない神様はきつと、私に寝ろっていつてるんだ。

もごもご小さくつぶやいて私は寝袋に潜ってようやく深い眠りにつ
いた。

目を覚ました私は、昨日作っておいたお茶を飲んで喉を潤して直
ぐに外へ出た。

寝床を後にする前に、雀を診たけど気持ちよさそうに眠っていた
のでそっとしておいた。
元気になるまで一緒にいてほしいけど野生の生き物なんだから、と
っとと治して森から出ていくのが一番だと思う。ここ、住むには向

かないからね。

外に出た私は、とりあえず昨日の夢だか現実だか全く判別がつかない時のことを思い出して周囲を確認してみた。

「やっぱり何にもない、か。動物っぽい足跡も、人間っぽい足跡も、毛も血の跡も……むむむ。夢の中で夢みてたってこと？」

そんな器用なマネができるなんて今まで気づかなかったけど、と少しだけ真面目な顔をしてみる。

いや、誰も見てないんだけど、雰囲気ってやつだよ。うん。

独り言を呟きながら、探索と調査をやめて目的の川に向かう。

昨日の罨に魚がかかっているかどうか確認して、居たらお持ち帰り、居なかったら罨を回収して今日の夜泊るところの近くに仕掛ける。

次に、川で体を洗う。

正確に言えば、汗とか泥とか汗とか汗とかを綺麗さっぱり洗い流して、ついでに身に着けてた下着を洗って鞆にぶら下げて歩く。

いや、あの、恥ずかしいよ?!ちゃんと人並みの羞恥心くらいあるよ!?

でもいいじゃないか！ここ人なんていやしないんだから！下着が乾くのを待つ暇があったら先に進んで少しでも早く森から出られるように歩く方がいいに決まってるじゃないか。美味しいご飯だって食べられる確率が上がるんだもん、こちとら必死だ。

「つ、つべたい……！う、ううう……でも、我慢できない温度じゃない……夏でよかった。冬だったら確実に死んでたね」

裸足になってそのまま服も脱ぐ。

どーせ誰も見てないんだし、相手は魚だ。跳ねて服が濡れるのは勘弁してほしい。

滑りやすい川底の石に気を付けながらゆっくり進んで罨を覗き込む。

「……いた……！……しかも3匹！うわあ、おいしそー！塩焼きにして食べよう！うん。あ、あとの近くで山菜も探そう。きつとある！ある筈だ……！」

きゃっほー！と思う存分喜んで、私は先に水浴びを済ませることにした。

魚は一度は言ったら出られないような罠を作っているのご飯を食べ逃すなんて危険性はない。

だったら早く身支度を済ませるに限る。

「魚が食べられると思ったたらなんか水の温度も気にならなくなってきた！いよおーし、今日も頑張つて歩くぞ！明日にはつけるように真ん中よりちょっと上までいつてやる！」

綺麗な水の流れる川で、成人した女が独り言を豪快に言いながら素っ裸で水浴びしてるこの状況こそ、たぶん異常だ。しかも、場所が自殺の名所として有名な森の中。

「……………独り言、ひかえようかな」

冷静になった時、ふと自分の現状を思い出してうなだれた。
私、山を下りるころには立派な野生人になってるかもしれません。
うう……腰に葉っぱとか巻いてたらどうしよう。

気が付くまで、もうすこしだけ……

.

洒落にならない野宿 3（後書き）

ここまで目を通してくださってありがとうございます。

作者としては頑張ってホラーを書いているつもりなんです。でも、あとで読み返すとどーしようもない三流ホラー？になっている罫。

あれー？（冷や汗

洒落にならない山登り（前書き）

本当は続けてアップしたかったのですが、仕事やらなにやらが重なって全く書けなかった……む、無念！

…閉話とか、はさんでもいいんかなー……はさみたいなー……

洒落にならない山登り

私の知らない、知らなかった世界は想像してたよりもずっと近い場所にあつたらしい。

おあずけを喰らってる犬もきつとこんな気持ちなんだろうな、と火をじつと睨みつける。

川で水浴びをした私は、魚を無事に確保した。

それから、寢床にしていた洞窟の入口付近で火を熾し、魚を焼いている真つ最中だ。

じじじじ、と実に美味しそうな音と共に枝にさした魚が焼けていく。

荷物の中から取り出した塩で味付けして、川辺で見つけた野草は魚

一匹と一緒に鍋の中。

潮汁もどきでも、お腹が一杯になるのはやっぱり汁系だね。

ぐーと主張するお腹から聞こえてくる音に、空腹感が加速して行く。

生焼けの川魚は食べたくないからものすごく我慢してるけど、やることはもう殆ど済ませた。

荷物はまとめたし、お茶のストックも作ったから問題ない。

後は本当にお腹を満たして元氣よく歩き始めるだけ。

昨日は変な時間に目が覚めて、変な夢？を見たけどそのあとはぐっすり眠れたので体力的にはなんの問題もないし、あとは川沿いに頑張って歩けばいいだけなので気楽と言えば気楽だ。

なんの目印もない森を不安まみれのまま歩き続けるのは、体力的以前に精神的にきつい。

一人で山を移動するのは、想像以上に精神力がいる。

しかも私の場合、知らない場所にぼーっと投げ出されて予備知識どころか心構えすらできてない。

そんな山の中で必要最低限のものをうまく活用しながらゴールを目指すっていうのはかなり、大変なことなのだ。いや、楽しんでもうていえば楽しんでもるんだけど。

「あ、そうだ。包帯かえるよー、おいで」

「チュンっ」

「地味に賢い雀だね、偉い偉い」

タオルの上にいる雀は逃げる気配もなく、わさわさと近づいた私を不思議そうに首をかしげつつ、素直に包帯がある方の翼を差し出すような姿勢をとってくれた。

人差し指で頭と人間でいうと頬つぺた（鳥で言えば耳のところ）をもしょもしょ撫でてから、取り出しておいた包帯と魚と薬草をとってくるついでに採取した昨日の薬草をすり潰したものを用意する。

「……あれ？何か傷跡がさっぱりないんだけど」

「チチチチ」

「いや、あの、答えてくれてるのはわかるんだけど何言ってるのかまではわかんないんだ、ごめん。えーと、それで、羽の方は良い感じなの？」

「チュンッ」

「元気そうだし大丈夫っぽいね。一応包帯は巻いておくけど、明日見て大丈夫そうなら包帯は取るから、一足先にこの森から出て仲間と合流してね」

「……………」

ぶいっと明後日の方向をむいた雀に思わず首をかしげる。

何か凄く人間らしい仕草で拒否された気がするんだけど、気のせいだよな？

でも、ま。白い包帯が痛々しいけど元気そうだし—安心と言えば—安心だ。

「そういえば、雀……君、餌は？」

「チチチチ」

「カブトムシとかバッタとかカエルとかコオロギとかゴキブリとかは大丈夫だけど、芋虫系と毛虫みたいなのか蝶々および蛾は心の

底から無理だからね！ミミズなんて有益虫だってわかつちゃーいるけど無理にも程があるってもんだし、自分でどうにかできそう？」

おそろおそろ確認すると、彼だか彼女だか不明な雀は「任せておけ！」的な勢いで鳴いた。

ほっと胸をなでおろして手当を済ませた私は、雀をどうやって運びながら山登りをするか考えつつ、焚き火に向き直る。

香ばしく、とても美味しそうに焼けているのを確認して、ついでに鍋の方も味見。

うむむ、なかなか美味しい。野草が魚の臭みとかうまい具合に消してくれたみたい。

川魚じゃなくて海魚だともっといい感じになるんだろうけど、ここは川だから流石に海の魚は泳いでないもんね。うう、美味しい焼き魚食べたくなってきた。

もぐもぐとすかさず魚にかぶりついた私にならって、雀もぴよんとタオルの上から飛び降りて地面へ降り立つ。

そのままトトトと跳ねたかと思えば、おもむろに地面をつつき始める。

ああ、うん、餌ですね。私の嫌いな類たぐいの餌を食べていらっしやるんですね。了解です。

さつと雀から目をそらして目の前のご飯に集中する。

昨日は朝ごはんを食べたつきり、カロリーメイト1本だけだったからかなりお腹が空いてたらしい。

よくよく考えると、お腹すいてて当然だよな。

もぐもぐ咀嚼をしながらふと、昨日の黒い影と夢のことを思い出

した。

森を歩いているときに見た黒い影は確かに、人の形をしていた筈だ。頭もそうだけど手足だってそれらしいものがあつた。

まじまじと見たわけじゃないけど、あれは確かに人だの形をしていたと言い切れる。

「（でも、夢に出てきた殆どは獣みたいな、唸り声だった）」

人の唸り声を聞いたことはないけど、あれは間違いなく獣の唸り声だ。

悲鳴や絶叫は“人”のモノで間違いなかった。

でも、その発生源はおそらく獣で間違いないだろう。

「（喰い、荒らされてた…とかだったら私も危ない、よね。まさか日本で動物に頭から食べられるかもしれない心配することになるとは）」

たははーと食べ終わった魚の骨をパラパラとそのへんに散蒔いて（有機肥料だ！）、鍋を川で洗えば即出発できる。

リュックを背負って立ち上がった所で、下から雀の鳴き声が聞こ

えてきた。
どうやら「飯を食べ終わっ」たらしい。

「お前、どーしよつか。流石にリュックの中に入れるのはダメだろ
うしなあ」

しゃがみこんで、雀を見ると雀も当たり前だというように鳴いた。
もしかしたら私の言葉をわかってるんじゃないだろうか。
何か言葉でも話すんじゃないだろうかと雀を見つめていると、雀は
羽ばたくマネを始めた。

「ちょっと、だめだよ！一応まだ怪我人…いや、怪我鳥なんだから
！あーと、うーんと、肩はあれだし……よし、ここでいいか」

「チュンツ！チチチチチ」

「あててて。もしよもしよダメだって！こちよばしい…ツ」

頭の上に雀を乗せてみたんだけど、雀は嫌がる素振りも無く嬉し
そうに鳴き出した。
流石に頭の上でフンとかはしないと思う。しないといいなー。

いろんな意味での恐怖心を胸に、私は立ち上がる。
歩いてる最中に落っこちたりしないよね？

はじめはヒヤヒヤしながら怖々歩いていただけ、すぐに頭の上の存在にも慣れて順調に歩いていた。

川辺を歩くか川辺に近い森の中を歩くかで少し迷ったものの、結局川が見渡せる範囲で森の中を歩くことにした。川が見えなくなったら、また川辺に戻ってそこから歩けばいい。

そう決めてからは、随分気楽に山登りができた。

「んにしても、雀すずめーって呼ぶのも味気ないよね。貴重すぎるじゃない体験を共にしたことを踏まえて親しみを込めて“チュン”って喚ぶことにしたよ。ほら、チュンチュン鳴くし、響きが可愛いと思うんだよね。呼びやすいし」

「チチチチッ、チュンチュンッ」

「ごめん、抗議されてるのが喜んでるのかさっぱりわかんないよ…頭の上だから見えないんだ」

頭の上で寂しそうに鳴くチュンに話しかけながら、ただひたすら獣道を進む。

ある程度まで登ってきたのか、徐々に傾斜がきつくなってきたけど、昨日ぐっすり寝たおかげで体力はある。

精神的にもチュンがいてくれるからまだ大丈夫。

逆に言えば、いなかったら今の私はかなり極限に近い状態だったと確固たる何かを持って言い切れる！

いや、何かってなんなのかはわからないんだけども。

頭の上にいるチュンに話しかけながら、4時になるまでは歩くと決めていたのでそれまでは頑張ることにした。時々、5分小休憩や飴を食べることで疲れをやり過ごしながら進もうと決意したのは確か数時間前だったと思う。

実際、岩つばいものや倒れた木を跨いだり登ったりしたけどそれなりに順調だった。

“それ”を見てしまうまでは。

「……す、須川さんのばか……!!」

地面に手をついて頂垂れた私はここで初めて、入る会社を間違えた
と心から思った。

洒落にならない山登り（後書き）

やっとupしたのになんたろうこの短さ。無念すぎる。

行き当たりばつたりにも関わらず、目を通していただいて本当に嬉しいです。ありがとうございます！

P S ・お気に入りが増えていました。すつごくすつごく嬉しいのに、なんだか申し訳ない気分です。精進します、ええ、頑張りますとも！

洒落にならない発見（前書き）

正し屋を書くたびに「優（主人公）じゃなくて本当に良かったな」なんて思う作者は多分何か間違ってる。

洒落にならない発見

見てしまったものを、見なかったことにできればいいと心から思う。

山に放り出されてから、今日で2日目。

まだたった2日目だから生きているのは当然として、チュンという可愛い同行者も増えた。

不可解かつ不気味なものに遭遇したりもしたけど実害はないし、ただ寝ぼけてたつてことも考えられるからなかったことにしてる。唸り声とかもその原理で空耳として処理した。

だってもし、幽霊だったよーんとかってオチだったら怖すぎる。

ただでさえ“自殺の名所”で、知る人ぞ知る“心霊スポット”という特殊すぎる場所に一人つきりで放り出されて容量オーバーしまくってるのに、未知との遭遇が加わったら確実にパーンってなる。頭的な何かが。

「……チュン、これは、どーみてもビジネス的なバックですよね」

ちゅん、と頭の上で小さな鳴き声。

鳥類に聞いたってわからないのはわかってるけど、聞かざるおえないこの状況。

急斜面の山を登った所で、発見したのは見慣れてしまった森に強烈すぎる自己主張をしている物体。

何が怖いって、自然の森って雰囲気丸出しのところにポツーンと妙に綺麗なビジネスバックがコロンと転がってる。

しかも、その横には靴らしきもの。

おそろおそろ、カバンが置いてある上を見る。

「（よし、いない）」

ほっとため息をついて、恐る恐る近づいてみる。
へっぴり腰なのは仕方ないと思うんだ。

腐りかけた人間と見たくないのはきつと全人類共通だろーし。

ビジネスバックが置いてある横の草むらを覗き込むと、そこには、
想像どおりの、でも想像とは少し違った形のものがあった。いや、
モノっていったらばちが当たるかもしれないから訂正しておくけど。

「……腐りかけてないにしても、人骨も、ちょっと……ただけな
いと思う」

ちゅん、と上から同意するような鳴き声が聞こえてきて私は思わず
「そうだよなー」なんてつぶやいた。

黒いスーツは汚れは目立たなかったけど、Ｙシャツは薄汚れている。
ただ、靴下に泥がついてないのは少し不思議だった。

靴脱いで歩いたなら普通は泥、つくよね？

「遺書っぽいものもない……って、なんか、胸のところに刺さった形跡がある、よーな？」

どばつと冷や汗がいろんなところから分泌され始めた。

頭の中で流れているのは水曜サスペンス劇場で流れるテーマソング。咄嗟に思い浮かんだのは『エリートサラリーマン謎の失踪！雲仙岳の裏の顔と隠蔽された過去！』というサブタイトルの殺人事件。うわぁ、ってことは私もしかして探偵的なことしなきゃいけないのかな？

ミイラや腐りかけた死体、生の死体はちょっと嫌だけど白骨になっただけはあまり怖くない。

ほら、骨格標本とかあるでしょ？友達でちょっと変わった趣味の彼氏さんと付き合って、プレゼントで人体模型と骨格標本を買ったらいい。友達は医療関係の勉強をしたから助かったみたいだけど、私だったら美味しいケーキを買ったほうが何十倍も嬉しいんだけど。

「と、とりあえず地図に丸つけて……と。後は免許書と時計とか携帯とかあればそれも持って行って警察に渡したほうがいいよね。流石にこのまま放っておくのは気が引けるし。これ、ちゃんと家族の人に渡しますから、安心してください」

南無南無、と手を合わせてからビジネスバッグの中をあさる。声をかけたのは、化けて出られるのが怖いからだ。やだよ、目覚めた瞬間にオバケのドアップとか！

カバンを漁っていると財布を発見した。

中には少しのお金とカード類があったので免許書を抜き取った。遺留品の一つとして持っていくのは、写真入りの手帳を見つけたのでそれにした。

それ以外は手を付けずにそのまま置いておく。変にいじると証拠とかが消えちゃうって、はきもの刑事がいったもんね！

遺留品はちょうど良くバッグの中にあつた未開封の封筒があつたのでその中にいれた。

これでリュックの中でバラバラにならなくて済むよね。

免許書をちらっと見たけど、20代後半から30代前半の中々かつこいい男の人だったらしい。

「うーん…自殺っぽくはないけど深くは関わりたくない……あー、なんか、ぶら下がってるんですけど」

呟きながら歩き始めて、30分程度たった頃、今歩いている所から50mほど離れた場所に見えたモノに思わず顔がひきつった。

鬱蒼と生い茂った木々のから偶然に見えたモノは、昨日見た黒い

影とは違つと直ぐに分かつた。

あの黒い影は揺れないだけじゃなくて……つて、あれ？あの黒いのつて服、とか身に付けてなかったような気がするんだけど。

それに気づいた瞬間、ブワツと鳥肌がたつた。

ついでに悪寒も感じた所でわれに帰つた私は、慌てて腕を擦る。

薄ら寒いつていうかなんというか……凄く気づかなきゃよかったと思つた。

「いく、べきだよー……な、生っぱかつたらやだなー！さっきみたいに骨っぽい感じになつてたら夢にも出ない、筈なんだけど。白骨つて近くで見ても標本見てるみたいでなんか怖くないし」

流石に、骨格標本を送られた友達の部屋になんとも泊まっていれば慣れる。

はじめはびっくりしたけど、服とか着てて完全にインテリア扱いだったし……慣れつつ怖い。

朝起きた時に、顔の真横に倒れてきたらしい骸骨の顔面があった時は、近所迷惑も考えずに大絶叫したけどさ……誰だつてそうなると思ふんだよね。

でも結局放っておくのは後味が悪いので恐る恐る、近づいた。

お決まりのように足元に手提げ鞆があつたからそこから免許書と時計を預かった。

これはポーチにいれさせてもらって、同じように地図に場所を書いておく。

「……わたしはなにもみてない、ほんとうになにもみてない、血の気のない真っ白い足っぱいのとかハイヒールとか黒くて長い真っ黒の髪の毛がだらぁーってなっていたりとかそういうのはぜんぜんまるつきりなんにもみてない」

自分に言い聞かせるように呟きながら、本来の道に戻る。

一応目印でチュンとチュンのベッドになっていたタオルを木の枝に結びつけておいたので迷うこともなく無事に帰れたんだけども。

精神的にぐったりして帰ってきた私を出迎えてくれたのは、癒しの塊のチュンだった。

心配そうに首をかしげながら私の表情を伺う健気すぎる姿にうっかり泣きそうになったのは内緒だ。

動物ではあるけど、心配してくれてるってだけで嬉しい。

「チュン、もうこの森やダヨー!!!今なら『翼をください』って

曲作った人に勲章贈れる！本気で翼が欲しい…びゅーんとひとつ飛びでゴールしたい」

「ちちちちつ、ちゅんちゅんちゅん！」

「慰めてくれるの？いい子だねえ…ありがとう。も、もうちょっと頑張る…あ、あれだよ。マネキンか蠟人形的な何かだと思えばきつと…！」

リュックを背負い直してから、チュンを頭の上に乗つけて再出発。

この時は明るい歌を無理に歌ってテンションをどうにか上げようとしたり、好きなもののことを考えたりしてどうにか気を紛らわせることができたんだけど…やっぱり、心のどこかに視界に入った光景がずっと引つかかっていた。

.

洒落にならない発見（後書き）

短いですが、一旦ここで区切りです。

ここまで読んでくださってありがとうございます^^

洒落にならない発見2（前書き）

牡蠣が食べたい。ものすごく、ものすごく、牡蠣が食べたい。

牡蠣の酒蒸しと牡蠣フライが食べたい。でも、生は食べられない…

でも、殻つきの牡蠣は高い…お金、ない。ぐすん。

洒落にならない発見2

がつくりと、私は綺麗な落ち葉の上に崩れ落ちた。

時間は丁度4時を回ったところ。

遠くの方からカラスが騒ぎ立てる声が聞こえてくるけれど、それも長くは続かなかった。

耳を澄ませると川の音が聞こえてくるから、川からそう遠く離れていないのは間違いないんだけど…明らかに今までとは違うものが目の前にそびえ立っている。

「なんでこんな所に鳥居があるんだろ？神社っぽいのがあるわけでもないし、お寺っぽいのも見当たらない…よね」

周りの景色は、鳥居がある所為か、木が生えていない。

住宅街にある最低限の遊具しかない公園のような広さがある。砂場と滑り台、後はブランコ位なら設置できそうだなーなんて思いながら周囲を見回して、鳥居の奥に灰色の何かが見えた。

所々、色が剥がれた朱色の鳥居の奥にあったのは、苔が生えた犬の石像。

狛犬と呼ばれるものだ気づいたのは、少ししてからだ。苔に覆われているせいで全体の形はわかったんだけど、表情が全くわからない。

何となく座ってるのがわかるシルエットと、耳の具合とかで犬だろうと見当をつけただけだから本当はお稲荷さんかもしれないけど。

「今日はもうここでもいいや……疲れた」

脳裏をよぎるのはここにたどり着くまでに見た数々の、死体。

死体っていつでも殆どが骨になってたけど、中にはまだその、新しいものなんかもあったりしてガリガリとMP的なものを削つてくれた。

腐敗臭っぱいのがなかったのが不幸中の幸いなんだけど、正直、かなり喜べない。

流石、自殺の名所として有名なだけはあるよねー、なんて言いながら薄ら笑いが浮かんだ。

「でも、明日の朝、魚がいつぱい掛かってれば立ち直れるかもしれない」

楽しいこと、楽しいこと！とそこまで考えた結果、そこにたどり着いた。

見ちゃったものはもう忘れるか、気にしないことにするしかない。ただでさえ、不気味で薄暗い森にいるんだから気持ちだけでも、前向きにいかないと！

…本音？本音は、自分も木の枝に宙ぶらりんになったり、包丁でぐっさりて人生を終えたくないんだ。

まだ甘いものも死ぬほど食べてないのに死んでたまるか！

「チュン、今日はこのワンコさんの横で寝ようね。狛犬って確か神社とかにいる守り神的な偉い生き物だった筈だから、黒っぽいのかもどうにかしてくれるかもしれないよ」

「…ちゅん、ちちちち」

「……なんか、鳴き方にばりえーしょんがでてきたね、チュン」

「ちゅんちゅんっ」

相変わらず可愛らしい鳴き声だけど、チュンがなんとなく呆れてるのはさっきから伝わってきてる。そりゃ、頭の上でチュンチュン言われ続けたら、はんなりとは分かってくるものですよ。嬉しいような、切ないような…。

宣言通り、狛犬らしき石像のすぐ横を寢床と決めたら後は昨日のように枝を集めることから始めた。枝拾いのついでに川から水を鍋に汲み、集めた枝で火を焚き火をする。周りに木はないから山火事になるなんてことはないと思う。

「元々、森が暗いせいであっという間に真っ暗になるね」

「ちゅん」

焚き火が安定した時点で、もう当たりは闇に包まれ始めていた。

黙り込むと静寂が当たりを覆って、時々聞こえてくる音は焚き火の爆ぜる音だけ。

パチパチという音は枝に含まれていたらしい水分が蒸発する音だと

昔何かのテレビでみたっけなー、なんて思いながら川の水を沸かして作ったお茶を飲む。

夕食のカロリーメイトはついさっき食べ終わったから、疲労回復のためにぐっすり寝れば一日が終わる。

狛犬の横に寝袋を敷いて、ごろんと横になった。

芝生のような草が生えている御陰で、ふかふかのベッドとまではいかないまでも快適に眠れそうだ。

くああ、と欠伸をしてから寝袋のすぐ横にちょこんと座っているチユンの頭を撫でてやる。

気持ちいいのかグリグリと自分から頭をこすりつける仕草は何度見ても癒やしだ。

「そういえば、包帯取るの忘れてた。おいで、包帯とるよ」

「チチチチッ!」

「そんな抵抗しなくても……もしかして包帯とりたくないの?」

「ちゅんっ!」

「……図ったようなタイミングで鳴くね、おまえは。まあ、いいや。」

明日の朝には包帯とるからね？」

「……ちゅん」

少し遅れて返事らしき鳴き声を返した野生の雀はピョンピョン小さく跳ねながら私の顔のすぐ横で眠る体制を取り始めた。

…本当に、野生、だよな？ なんか、目覚めた時から野性っぽさを微塵も感じてないんですけど。

私よりも先に寝始めた臆病であるはずの野生雀を観察してみたけど、答えは出そうにないので諦めて寝ることにした。
一日中歩きっぱなしだったことや、精神的なダメージが自覚している以上にあつたみたいであつという間に眠りに落ちた。

だから、疲れや睡眠欲によって注意力が普段以上に鈍くなっていた私は、頭上から熱心に視線を注がれていたことにも全く気付かなかった。

ついでにいうなら、眠っていたはずのチュンがパチリと目を開いて
じっとその視線の主を観察し始めたことにも気づかない。

だって、ほら、寝たあとだったしこれで気づくほづがどうかしてる
とおもうんだよね！

洒落にならない発見2（後書き）

み、みじかい!!（汗

最近リアルが忙しくて1日〳2日うつpはかなり難しい感じになります。

ストックとかないからなあ…orz

次は普通通りの長さでかけることを祈っています。がんばります、はい

んでもって…やっぱり登場人物が人間1人と雀1羽って厳しいです（爆

ここまで読んでくださってリがとうございました！
そして、アクセスしてくださってありがとうございます!!

閉話 観察というより高みの見物（前書き）

ちよつとばかり変化をつけようと思い、今まで殆ど出番のなかった上司様サイドのお話を挟んでみます。

れつつ・さんどいつちー！

閉話 観察というより高みの見物

巡り逢うべくして巡り逢った のかもしれない。

持っていた筆を置いた所で、今日処理すべき仕事片付いた。

墨が僅かに残っている硯と筆を手に専用の洗い場へ向かう。
硯と筆を片付けたら風呂に入ったら眠るだけなのだが、店が終わった
ら電話をすると雅が言っていたのでそろそろ電話がくる筈だ。

手を動かしながら、普段とほとんど変わらない作業を終えて風呂場へは向かわずに事務所の椅子に腰掛けて、冷めてしまったお茶を一口飲み下す。

「……経歴は一般的、家族構成はやや特殊ではあるものの特筆すべき問題はないようですね」

机の上にある履歴書と“報告書”に目を通しながら、自分の目で確かめた情報を追加していく。

出会いは珍しい不注意からだった。

考えを巡らせながら歩いていた私に、彼女がぶつかったのだ。

私に衝撃は殆どなかったが、少し驚いて視線を下に向けると地面に手を付いたスーツ姿の幼顔の女性がいた。

状況を理解していないのか、口と目を開けて呆然としている様は、中々面白い。

周囲には、ぶつかった衝撃で投げ出されたと思われる男性用のビジネスバッグと草臥くたひれた求人誌があった。

物思いにふけっていると、電話のベルが鳴る。

時計は、10時を回ったところだ。

仕込みを終えて一息ついた頃だろうと推測しつつ、電話を取る。

「もしもし？」

『遅くなって悪かったな。あー、今大丈夫か』

「ええ、仕事も片がつきましたし、契約に必要な諸々の手続きも明日には完了します」

普段の仕事は8時前後には終わる。

今日はそのほかにも臨時の仕事があった為に遅くなったが予想の範囲内だった。

『っはー…相変わらずだな、お前は。完璧すぎんのも大概にしねえーといつかザックリやられんぞ』

「貴方と違って日頃の行いがいいので大丈夫ですよ。で、要件はなんですか？十中八九、彼女のことだとは思いますが、一応聞いておきます」

『わかってんなら聞くんじゃないよ、まったく、嫌味な奴だな。……なア、本当にあのちまつこいのを雇う気か？』

「そのつもりですよ。雅、^{みやび}あなたも気づいたでしょう？彼女は“こちら”の人間です」

こちら、というのは“視えない”人間やそういったものの縁^{えん}が薄い人間ではないことを言う。

簡単に行ってしまえば、江戸川 優という女性には肉体を持たぬものの縁があるということだ。

一般的に、こちら側ではない人間は、私たち“見える”人間にとって一番厄介で扱いが難しい。

“見える”のなら余分な説明は不要であり、予備知識がなくとも1を見れば、2もしくは3くらいまでならば理解できる。

これが“視えない”人間ならば、1もしくは0から説明をしなくてはならない。

中には言葉で説明しても理解しようとしないうる者もいる。

こういう人間は自分自身に命にかかわる実害が生じなければ決して理解しようとしないのでから面倒極まりない。

『そりゃー…まあ、店に入ってきた時点でわかったけどよオ。ありや、どーいった特性持ちだ？俺らの系統じゃねエってことだけは確かだが』

「名刺の色は無色透明でした。私のような系統でもないでしょうね、近しいものは感じましたが」

『……オイオイ、お前さんでもわからねえのか?!』

「私にだってわからないことの一つや二つはありますよ。ただ、“彼ら”曰く彼女の傍はとも居心地がいいそうです。興味深いことに、神仏クラスの方もかなり好意的で、式になってもいいと言い出したものもいました。理由は霊力が好みだから、とのことだったのですが……」

『なんつーか、神ってそんなんでいいーのかよ』

「神によりますね。私の知っている方々はかなり人間に近いところで暮らしていたこともあって、神という括りの中には変わり者に部類されていますが実力はありますよ?」

受話器の向こうで聞こえる唸り声の御陰で彼の心境を推測し、ため息を吐く。

この黒山 雅という男も十分変わり者ではあるのだが、当人は全く自覚していないらしい。

山を降りて日常生活を営んでいる僧侶は少なくない。

けれど、大抵が寺や神社といった家業を次ぐか一般人に混じって就職し静かに生活しているものが殆どだ。

中には霊媒師や霊能力者などと名乗り仕事をするものもいるが本物は数えるほどしかない。

大概は“見える”だけであったり“感じる”だけしかできないものばかりだ。

「どちらにせよ、本物になるかどうかはいろいろ試してみないとわかりませんからねえ」

『試すって……、もしかしてお前ッ！！またあの無茶な方法で力を引きずり出そうってんじゃねーよな？』

「あの”とは“どれ”のことですか？」

『真冬に滝修行1週間と護摩焚き修行1週間ぶっ続けはないだろ。あと、ど素人に霊場で山伏修行はなァ……お前、真面目に教える気なかっただろ。ずぶの素人を放り込むのは命捨てるつつてるよーなもんだろーが』

「命を捨てる覚悟があると宣言し、契約したのは彼らですしいつでも退避できる状況も整えていました。事実、あれに耐えられればその後の修行にも耐えられるでしょう？」

『お前の修行はただの鬼の所業だ。修行じゃねーよ』

「私も始めは一般的な修行内容を紹介しましたよ。ですが、どうしても短期間でと言ったのは彼らでしたし、必ず修行をして身に付くものではないことや忍耐力や強い意志が必要だとも伝えました。そ

れでも、と無理を言って修行を承諾したのですから自己責任でしょう？」

正し屋にくる人間は大きく分けて二通りいる。

まずは、依頼人と呼ばれる本来の仕事を持ち込んでくる方たち。彼らが居なければ商売は成り立たないので、基本的には歓迎している。

中には無茶を言ってくる方もいるが、こちらで定めた契約を破らない限り“客”として扱う。

問題なのはもうひと通りの人間たちだ。

彼らは依頼人としてこの店にやってくるが、どれも契約に違反する依頼を持ち込んだり、話にもならない要求を突きつけてくる。大抵、話を通じないので実力行使に出ざるおえない。

雅が挙げた修行の例は、実際に修行として行われていることだ。ただし、意図的に体力的にも精神的にも厳しい内容にした。

実際、厳しいのは稀にある“本物”や“当たり”と呼ばれる質の悪いモノが相手になった時だ。

視えなければ避けることができず、退ける術と力がなければ引き込まれ、知識がなければ対策を練ることも実行に移すこともできない。

その先に待つのは、恐怖か死か多大なる代償。

『まあ、あの連中に関して言えば俺らにとってもいい“見せしめ”になったけどよォ…アレをあのちみっこいのにやしねーよなア？』

「彼らと彼女とでは前提が違います。そもそも、勧誘したのは私ですし、色々と興味もありますから悪いようにはしません。まあ、じっくり時間をかける余裕もないので少しばかり強引な手段に放つてしまいますが黒と白を付けるので死ぬようなことはないでしょう」

恐らく、と心中で付け加えたが口には出さない。

それから暫く情報を交換してから電話を切った。

時計を見ると十一時になる十五分前で、かなり長い間話し込んでいたことに気づく。

「やれやれ……明日から、賑やかになりそうですね」

風呂場へ向かうべく腰を上げた私の視線に飛び込んできたのは、彼女に“支給”する道具だった。

正し屋の事務所にはそぐわないそれらを受け取った彼女の反応を想像するだけで口元が緩む。

彼女はきっと、私と私の日常を変えてくれるのだろう。

ま
し
ょ
う
か
…
さ
あ
、
高
み
の
見
物
と
い
き
？

閉話 観察というより高みの見物（後書き）

とりあえず、こんな上司嫌だ。
怖すぎる。

読んでくださってありがとうございます！！

洒落にならない遭遇 1（前書き）

冬になるとおでんが食べたくなくなります。

ちなみにおでんの具ではこんにゃくが一番好きです。二番手は竹輪。こんにゃくっていえば白いのより黒いの方がレアっぽい気分になる。

洒落にならない遭遇 1

この日も変な夢を、みた。

始まりは真っ暗で、ぼつーんと暗闇の中に私が立っていた。

昨日もこんな感じの夢をみたからわかるんだけど、間違いなくこれは夢だ。うん、夢だ。

私の頭にあるのはこれが“夢”だという安心感。

目が覚めて真っ暗で……うう、もうやめとこう。昨日のはあれだよ、大分寝ぼけててお腹の虫が鳴らした音を誤変換したんだ！耳とか頭とかが！

「にしても、こんな服持ってた記憶ないんだけどな……来てる服はズボンだし」

自分の足と来た覚えのない白いスカートがひらひらしている。スカートなんてめったに履かないから、スカートの柄とか色くらいなら覚えてる。

「メルヘンな服着る夢を成人し終えて見るとは思わなかったなあ」

じーっと白スカートを見ていると無性にふわふわスポンジのショートケーキが食べたくなった。クリームは甘めがいい。

で、スポンジの間には生の苺をしっかりと挟んで、一番上には大粒の真っ赤な苺を所望します！

仕上げる

アールグレイにミルクを少し入れて、一緒に食べられたら例え自殺の名所だろうが、オバケがいっぱいいる廃屋だろうが立派な当分補給の時間になる。間違いないね、うん。

お腹がすいているらしい私の思考は、あっという間に甘いものに傾き始める。

時々、焼き鳥とかラーメンとか食べたいなーなんて思ったりもしたけど、サイドメニューです。

甘いものばかりだと舌が甘いのに慣れちゃうからね！

何も見えない闇の中で意味も無くニヤニヤしていた私は、ふと違和感を覚えた。

周囲を見回してみるけど、真っ暗なままで変化はない。

自分の体（といっても目に見える範囲だけ）を確認してみたけれど、足が細くなったとか背が高くなったとかそーゆー変化もない。

そもそも、違和感っていつても、ただ何となく“あれ？”って思っただけで根拠はないし、私に何かがあったって訳でもない。

敢えて言うなら、ポンツって頭の上に電球が現れた感じ？

なぞなぞの最中とかでもないんだけど、本当に何か、パツと何かが一ピコンツてきたのだ。

「なんだっ たんだろ、さっきの感じ。特に変な感じはしないんだけどなあ」

変なの、とボヤきながら髪をごしゃごしゃーっと掻き回してみる。

髪の毛がボサボサになったけど、もとよりボサボサだったから気にはならない。

それから少し考えてみたものの結局というか当然というか、答えは出なかったので考えることを放棄した。

はーっとため息をついたところで、遠くの、でも頭の中に響くような声が聞こえてくる。
ノイズの入っていない、調整不良のラジオを聞いているみたいな感じ。

声の感じからして男の人だってことはわかるんだけど、それ以外はわからない。

でも、暗くて重い。

墨化したホワイトソースみたいな、ドロドロしていて元の、本来のモノには戻らないような状態。

反射的に、聴きたくないと思っていたらしく耳を塞ぐように手を当てていた。

<.....て、.....ば、...んだ...>

聞くな、聴くなと念じても、それは頭の中に響いてくる。

耳を塞いでも駄目なのだと分かってしまつて、仕方なく手を外した。どうやつても聞こえてくるなら、諦めるしかないよねー。

開き直つてしまえばこっちのものだ。怖いものなんてなーんにもない！

「さア、どつからでもかかってこいー！」

< ど して、 おれ ば り、 こ な め あ
ん だ ？！ >

「……すいませんごめんなさい撤回しますかかってこないでください後生ですからー！」

前言撤回します！

言わなきゃよかった、言わなきゃよかった！猛烈に後悔をしながら
思わず後ずさる。

でも、真っ暗だから下がっている感覚はあっても、下がっているの
か進んでいるのかはわからない。

本気で勘弁して欲しいんですけど、心の中で盛大にボヤいた。

< どうして、俺ばかり、こんな目に合っただ！？ >

「へ………？」

< 俺は悪くない！俺は、俺は何にも悪くないのになんで、どうし
て……ッ！！ >

思わず、知らんがな、といいそうになったけど、でも、辛い時や苦しい時にこんな風に思ってしまうことがあるのは知ってる。

私だって、似たようなことを思ったことがあった。

どうして、なんで、私だけ？そんな風に考えるのは、周りが見えてな方からだって今なら言える。

けど、その時の私はわからなかった。

自分の気持ちの整理が追いつかないまま、現実だとか問題だとか嫌なことばかり積み重なって、上手く息を抜くことができない状態だったから……周りを見る余裕なんて、ある筈がない。

そもそも、そんな余裕があったらそーゆー自体に陥ってないよ。

「どうにもならないなら、どうにもならないりの対応があると思うんだけど……」

＜ 俺は悪くない、俺は間違っただけなんかない！！どうして、なんで

俺だけ…ッ！！>

「ダメだ、聞いちゃいねーですね」

< 私の、なにが悪かったの >

「しかも、なんか増えてるんですけども」

< アイツのせいで、アイツさえ…アイツさえ居なければ…ッ！！>

「……なんか、大分、まずい雰囲気だの夢、ですねー……」

ごくり、と思わず生唾を飲む。

夢なのにもものすごく嫌々な危機感を覚えるんですけど…？

反射的に引きつった口元と完全なるへっぴり腰で私の感じた危機感的なものが表現できてると思う。いや、無意識なんだけどね！！リアクション芸とかじゃないんですよ。

いつの間にか真っ暗な闇の中に沢山の光が浮かび始めていた。

気付いた時は3つだった、小さな炎みたいな光は点々と、数が増えていく。

それらは私を取り囲むように数を増やし、どんどん大きなものへ変化している。

はじめは、蠟燭の炎位だったのに手の平大にまで成長し……色も毒々しい赤色に染まっていく。

色が変わること自体は、少し嫌だなとは思ったけど恐怖を抱くことはなかった。

ただ、赤くなっていくのに比例するみたいに、声がどんどん洒落にならない感じになってること以外は。

始めに聞こえた男の声は支離滅裂になっていて、もはや言葉ではない。

次いで悲しそうな女性の声は恨み辛みに代わって今にも良く心霊番

組とかで見る怖い女の幽霊になりそうな雰囲気だ。髪が長くって、にたあって笑うかゆらあゝと出てくる感じの怖い奴ね。

あれが声を出したらこんな感じだと思う。

そして、最後に聞こえた八つ当たり気味な男の人の声はもはや、言葉ではなくなっている。

（早く、目を覚まさないと…ッ！！これ、昨日の比じゃないよね…?!）

冷や汗を大量にかきながら、必死に考えた。

夢の中で冷や汗をかく羽目になるとはおもわなかった！！とかなんとか思いつつ、一心不乱に起きる起きるとまだ寝ているらしい自分を叩き起す勢いで念じるけど起きる気配は全くない。

どんだけ眠ってるんだ私！暢気^{のんき}にぐーすか寝てる場合じゃないですよ！！本人（夢だけど意識がはつきりしてるから本体？）が起きろって言ってるんだからちゃんと起きて！

うがーっとしゃがみこんで真っ黒な地面（一応立ってるし地面でいいとおもう）をベシベシ叩きながら半泣きで泣き叫んだ。

もう恥も外聞もあるか――!!――とりあえず起きて――!!――!!

.

洒落にならない遭遇1（後書き）

そういえば、昔、夢の中で怖い夢を見ても自力で強制終了がかけられました。

…今はもう、そんな器用な真似はできません。

ここまで読んでくださってありがとうございます！

結局ストックは出来なかった……明日頑張ります…orz

洒落にならない遭遇2（前書き）

犬が好きです。

しかも、小型犬じゃなくって中型〜大型が好きです。

柴犬は文句なしに可愛い。

大型犬はゴールデンレトリバーがいい。

洒落にならない遭遇2

きつと生き物は、一人では生きていけないように出来ている。

私は今、炎の中にいた。

正確には炎のようなものに囲まれている、だけど。

夢の中で焼き殺されるなんて正直、御免被^{ごめんこつむ}りたいけど、その可能性は大いにありえるので正直笑えない。

ぐるりと私を取り囲んでいる炎（この場合は人魂？）の中には赤黒くなっているものもあった。

赤黒いものの一つに注意していると、唯一赤黒さを残していた中心部分の色が濃くなって
∴ 闇に溶けてしまいそうになった、
そのタイミングで突然、掻き消えた。

真っ暗な景色に同化したのかな？とか見間違いかもしれない思ったりもしたけど、どちらでもないことはスグに分かった。

恨み辛み、妬みや呪いの言葉に紛れて聞こえる、悲痛な、もしくは声にならない絶叫。

驚いて周りを見渡すと、なんとなく目に止まった大きな橙色と赤の中間といった色合いの人魂が、散って消えた。ぐにやりと上下に潰されて、飛び散った小さな火が消えるより早くソレはこの空間から永遠に消えてしまう。

（なんか、今のって……なにかに、食べられちゃったみたい、な）

何となく、近所の犬が大きなお肉を嬉しそうにガブリと食べていた時のことを思い出した。

確か、山で迷子になっていた飼い主を見事見つけて、救助隊を呼んだご褒美、だった気がする。

あんまり高くないお肉だとはいつていたけど、豚だか牛だかのお肉の塊だった。

それにかぶりついて、嬉しそうに尻尾を振ってたっけ……可愛か

ったなあ。

ってそれどころじゃないよね、この状況！

ぽっかりと空いたスペースには、いつの間にか別の人魂が浮かんでいた。

それは弱々しい橙色だったのに、周りの影響を受けてかじわじわと外側から赤く変色していく。

水彩絵の具が溶け込んでくような不思議な光景。

きつと、こんな状況と火が人魂っぽくなければ綺麗だと思えるんじゃないかなー……普通にキャンプファイヤーとか花火とかそういう系統だと本当に綺麗だと思う。大変そうだけど。

ポカーンとしている間にも私と人魂の距離はじわじわと縮まって、1m近くはあったはずの私とひと玉との距離は半分は確実に縮まっていた。

嬉しくない。ものすごく嬉しくない！！

「って、ちょっと待った！さっきから食べられてる頻度高くなって

ない！？つか、色が全体的に黒ずんできてるよーな……黙っばい
声も、うつすらどころか明らかに混じってるし」

勘弁してください。本当に。

夢の中なのに、夢の中だって分かっているのに物凄くリアルな危機
感を覚えた私は再び一心不乱に目を覚ませ目を覚ませと祈った。祈
る通り越して、もうなんか念じまくってた。下手したら一種の呪い
だ。

「う、うわああああん！！もーなんで目エ覚まさないの！私の馬
鹿！寝に汚いにも限度つちゅーもんがあるでしょーが！！本体的な
私から起きろって指令が出てるんだからちゃんと起きてよおおお
お！！二度と井の中に甘いものいれてやらないんだか………ひい
いいいいいい！！ちよつと、ちよつとまって火の玉！！さっきよ
り近づくペース早くなってますん？！当社比で確実に1.5倍は早
くなってますから！マジ勘弁！ほんとにすいませんごめんなさい！
私日頃の行いが特別悪いわけじゃないんで見逃してください、なん
なら毎日なんかしますから！一日3回は食べてたオヤツも1日1回
に減らすからああああああ！！」

ゆるーしーてええええええ！！と半泣きになりながら土下座をした。

誠意を表すのに土下座は最上級のスタイルだって死んだおじいちゃんと言ったもん！酔っ払うと必ず「ばーさんに“ぷるぽおず”した時もこれが一番聞いたんだぞ！」っていつてた！ばーちゃんは「道端で泣きながら土下座されて可哀想になっちゃったのよねー、犬を拾った感じがしら？」って笑ってたけど！

傍から見たら、凄く間抜けすぎる光景だったとは思っ。

だって火の玉サークルにペコペコ半泣きで頭を下げてるんだもんね……土下座で。

急加速した火の玉にビビっている私をあざ笑うかのように火の玉は、笑い声や怒鳴り声、恨み辛みの呪いっぽい声を発しながら近づいてくる。

獣の唸り声も、消えては増える火の玉も徐々に大きくなっていてそれが手を伸ばせば届くような距離に来た時……

（あ、私の人生終わった）

「冗談抜きでそう思った。

近づいてくる悲鳴すら、なんだかもう嘲笑にしか聞こえない。もしくは生贄を前にして喜びまくってる悪魔的な何かの声だ。

土下座スタイルから開き直って、ぼんやりとその場で正座をした。

あぐらでも書いてやろうかと思ったけど、正座の方がコンパクトなので却下だ。

これでもまだ現世に未練があるので最後まで些細な抵抗をしてやろうと思ったのだ。ふふん！

人生短かったなーとか考えていると、どこからともなく、聞き覚えのある音が耳に飛び込んできた。

控えめではあったけど、それは確かに聞き覚えのある音。思わず、その場で立ち上がりかけて、人魂が近くにあることを思い出した。

危ない、危ない。

結局、膝立ちの姿勢で落ち着いた私はパツと視線を周囲に巡らせた。

必死に周りを見てみるけど、火の玉しかみえなくて“うわぁ”と人事みたいな声が漏れる。

でも、まだ小さな声は聞こえているから、炎の壁のように立ちふさがるソレらの僅かな隙間から必死に探した。

（だぁぁあつ、もーっ！火の玉、ほんとに邪魔くさい！！）

焦りながら一つの音を探す私を嘲笑うように、火の玉のものとかわれる声たちが大きくなる。

それに比例して獣の唸り声や消えていく火の玉も増えたり、減ったりを繰り返す。

「ッ、ええい！！チカチカチカチカして目に優しくないッ！！ちゅーん！チュン、ちゅん〜！！どこー？！」

聞こえたのはチッチッチというチュンの鳴き声だった。

小さくて聞き取りにくかったけど、でも間違いなくチュンの鳴き声だ。

雀の鳴き声の区別するなんて器用な真似ができるとは思わないけど、頭にパツと浮かんだのはチュンの姿で、きつと、チュンの声なんだと思う。

そもそも、雀に知り合いなんてチュンくらいしかないし。

声を張り上げてチュンを呼び続けていると、手の甲に物凄い痛みが

走った。

……表現するなら、チクツビリッ！って感じ。
一点集中型の痛みだったよ！
思わず飛び上がった位だし、絶対血イでてる。
だってなんかそーゆー痛みだった。

にしたって、ちょっとした虐めですか？コレ。
私、夢の中とはいえ頑張ってたとおもうんですけども……足りませ
んでした？
頑張って山歩きして、怖い夢見たんだから褒美位くれてもいいと
思うんだよね。
困むんなら火の玉じゃなくなっけーとか大福とかにしていよ、私の
脳みそ！！

痛みを猛烈に伝えてくる手の甲は、じんわりと血が滲んでいるのが見えた。

暗闇だけど、肌が露出しているところは白くぼんやりと浮き上がっているのかろうじて、その白いところにプクツとしたものがある。間違いなく、血だ。バツチリ出血してる。

うう……なんか血を見たら益々（ますます）痛くなってきちゃったんですけど。

「ちゅん！」

「……あのね、エッヘンって胸張られても凄く、痛いです」

「ちちちちちつ、ちゅんちゅんちゅん！！」

「うん、ごめん。何言ってるのかわかんないんだ……でも、今度とつかで鳥語講座とか見かけたらやってみるよ」

ちよつと、というか結構痛いけど可愛いから許すことにした。

撫で撫でと頭を撫でながら、ふと顔を上げる。

いや、別にここでそういえばさっきの人魂はどうなったんだろーと思っただけじゃないよ！

別に忘れてたわけでもないよ！

「あ、あれ…もしかして私、起きた…？」

自分が起きた自覚がなかったからビックリした。

多分、起きた自覚がなかったのは夢と同じくらい真っ暗だったからだと思う。

や、流石に周り明るいのにまだ寝てるんだわ〜うふふ、みたいな自体にはならないよ？ホントだよ？！

洒落にならない遭遇2（後書き）

ちよつと尻切れトンボ気味。

むむむ・・・、でも一応“悪夢”はここで終わりです。悪夢は、ですけど。

ここまで読んでくださってありがとうございます！次こそ頑張ります。

洒落にならない遭遇3（前書き）

今の時期、森で野宿したら確実に凍死します。

B
y 北海道

洒落にならない遭遇3

起きたのは、わかった。

でも、それだけです。

夢とほとんど変わらない暗闇なのに、おどろおどろしいあの声も音も聞こえなかった。

なんだか、静まり返っているのが不気味で仕方なくて無意味にそわそわする。

落ち着かないのはきつと、さっきまでいろんな意味で賑やかだった場所から、突然静まり返った場所に帰ってきたからだと思う。

さつきまではあんなに怖かったのに、いざ目覚めてみると今度は現実の方が怖いと感じるんだから変な話だね。いや、どっちにしてもこの森自体が怖いんだけどさ。

なんだよ、自殺の名所って！私救助される確率ものつそいないじゃないか！とかなんとか心の中でブツブツ言いながらチュンを撫でていて、少し驚いた。

「……？チュン、どこ見てるの？」

「……………」

「いや、あの、流石にちょっと切な……あ、れ？」

チュンがじつとある一点を見ていることに気づいて、何気なく視線を向けてみる。

自慢じゃないけど横断歩道は何となく2度見してから渡ります。

その先にあるのは確かに暗闇だった。

真っ暗で、おそらく出ているはずの月の光も届かない陰鬱いんうつとした森に光っている何かが見える。

最高級のガラス細工を見てるのかもしれない、と一瞬考えた。

でも、流石に地上から単独で浮いているガラス細工や宝石は見たことがないから、違うんだろう。

「チュン、アレはなんかよくわからないけど……綺麗だねー」

思わずこぼれ落ちた独り言は、やっぱり独り言で終わった。

チュンはただ、じっとその赤い綺麗なものを見ている。

私もそれにつられて闇の中に浮かび上がる赤いモノを眺めていると、それがほんの少し近づいてきたような雰囲気を感じ、思わず目をこすった。

くしゅ、ともくしゃ、とも言えない、生きた草を踏む音が一定の間隔で4回響いて、跡形もなく空気に溶ける。

この、綺麗な赤の持ち主は動物なのだ！と、頭のどこかで告げられた。

お告げ体験は初めてです！ってそんなお馬鹿なことを行っている場合じゃなくなったのは、ほんの数秒前のこと。

いやね、背後にね、なんか、いるっぽいんですよー！！あは、あはははははっ！！

冷や汗と冷や涙（ひやつとして出てくる涙って感じです。うっかりでちゃったんです、普段は強い子だと思います、私）と悪寒を引き

起こしてくれたのは多分、昨日うつかり何度が目撃してしまった黒い人影。

後ろを確認したわけではないんだけど……奴と出会った時にバビビッ！と来た感じが似てる。嫌な方向に。

爽快さとは真逆の位置にありそうなこの感覚はそうなんでも経験できるようなものじゃないこと位、理解し始めていますとも。現在進行系で経験しちゃってるからね！

黒い影が突如出現する直前、ずっと赤く綺麗なモノを見つめていたチュンが、甲高い、それでいて緊急事態を知らせるような鳴き声を挙げた。

よく、例えば“まるで火がついたように子供がなく”とかあるけど、ソレの鳥バージョン。

（チュンは、教えてくれてたのかな…、もしかして）

体中の羽毛を逆立てて、怖いのかプルプル小さく震えている癖に私より何十倍もちっちゃな体で私を守るように“何か”に向かって鳴き続けている。

なんだかもー、それを見たら悪寒とか恐怖とかそんなんどーでもよくなって、とりあえずこの可愛すぎる生き物を優先的に考えることにした。私には須川さん印のお守りがある。それに、塩だっである。明日の夜には意地でも着く予定だから、塩だっってちよっとくら

いなら使えるんだよ、大事に使ってたからね！

「ありがとう、チュン。ここに隠れててね…一応、水浴びは下から汗臭くはないと思うけど…居心地悪かったらぴょーいって飛んでつてくれてもいいし」

「チツ?! チチチチチッ!!!」

「はいはい、大丈夫だよ。怖いっちゃー怖いけど、チュンがいるし、おちおち死んでらんないよ。まだケーキも大福もお腹いっぱい食べでないし、新しく出来たクレープ屋さんの評価もまだしてないからね」

チュンを握りつぶさないようにそつと両手で掬すくい上げて、とりあえず、安全そうな懐（というか服の間）にいれた。
少しばかり、乳に鳥独特の爪が食い込んで痛こちよばしいけど、我慢できないほどでもないしチュンもチュンなりに体を落ち着ける位置を見つけたらしい。

「ちゅん!」

「か、かわええ……！！もしここを無事に出られたら写真撮らせて！
かわいすぎる」

「ちゅんちゅんちちちっ！！」

「へ？ああ、そういえばそうだったね………？あれ、なんかさ
っきのいなくなっただけ？」

チユンに叱られて視線を戻せば、そこにはもう、なにもいないよ
うだった。

とりあえず、寝袋から出て、その上に座り込む。
一通り周りを見たけど、さっきのザワザワくる感じは全くない。

「見間違い、って訳じゃなさそ………うつ！？」

変だなー、と呟きながら寝袋に潜ろうとした私の耳に、ぶちゅり、
ごりゅ、という生々しい音が聞こえてきた。

はじめに聞こえてきたのは、何か適度に柔らかいものの繊維を無理
やり引き裂いていくような音と骨のように硬い何かに当たってそれ

が一旦止まる音のようにも聞こえる。

ごくり、と私が生唾を飲むのを確認したように、バリバリと硬いモノを豪快に噛み砕く音が聞こえた。

ぎゅわあ　あ　あ　あ　あ　あ　！！

擬音にするなら、多分、これが一番近い。

怒号にも似たものすごい衝撃波のようなものが私がいる一体の空気を震わせた。

無意識に握り締めた寝袋と、胸の間でぶわつと羽毛を逆立てているチュンの存在を感じながら私は、身動きひとつ取れないまま固まっていると、四方八方から　　…あの、黒いと同じ気配が現れる。

ひゅつと喉を空気が通って、私はそれっきり息をひそめる。

かつてないほどに緊張していると今の私なら言い切れる。

黒いのに、バリバリと何かを捕食しているなにかに気づかれないようにに必死に気配を消そうと意識する。

心臓の音が頭の奥で聞こえているのに、気配にだけは過敏になっている様な気がした。

何かを食べるような音は、絶え間なく、黒いのが増えるに従って感覚が短くなっている。

多分、捕食しているなにかは、あの気味が悪い黒い人影を喰ってるんだろう。

どんなゲテモノ食いでアレは食べたいとは思わないと思うんだけど……たぶん、ものつすぐく悪食なのか飢えているのかのどちらかだろうと見当をつけた。もちろん、証拠なんてなにもない、ただの思い込みだけだね！

バリンボリン豪快に骨ごと噛み砕くような音が聞こえてから、どのくらい経ったのかはわからない。

でも、確かに何かが終わったのだと私は気づいた。

それは音が変わったせいでもあるし、黒いのを見た時の悪寒がナリを潜めたからでもある。

ごくり、と乾ききった喉を潤そうと体が無駄な努力を実行したけど唾液なんて出るはずもない。

喉どころか口の中自体が、カラツカラのサハラ砂漠か鳥取砂丘並に乾燥してるんだから。

はー、はー と自分の浅い、それでいて緊張し切ったような息遣いが耳障りだった。

米神や背筋を伝う冷や汗も不快で、明日の朝、歩く前に水浴びを使うと心に誓う。

多分、こんな状態でも私が気を失ったり、気が触れたりしないのはチュンのお陰だ。

自分より小さな生き物の存在があるから、私は自分を保っていられる。…ギリギリで火曜サスペンス劇場の説得景色並みに崖っぷちに
いるけども。

ぱた、と何かが落ちる音がする。

パタパタ、と連続してナニカ ……液体が、草の上におちる
ような…… 音が聞こえる。

そして、同時期くらいに耳と意識に飛び込んできたのは、さくつさくつと草を踏む人ではない重さの何かが近づいてくる音だ。

かろうじて手の届く範囲が、うすらばんやり見える状況でこれは怖い。とても怖い。非常に怖い。

どう、しよう。

なんの解決策も浮かばない私は、ただ、冷や汗を流しながらそんなことを考えて

……暗闇に、意識をさらわれた。

これが私にとって人生初となる失神でした。とーぜん嬉しくない。

洒落にならない遭遇3（後書き）

や、やっと書き終わった…二日目の夜のお話です。

次は三日目の朝！の予定。

あー、早く終わらせたい……！

ここまで読んでくださってありがとうございます！

P S .

お気に入りが増えていました…び、びびでびびでぶー！！（驚嘆の意）

あの、ほんとにありがとうございます。が、がんばるー！！

洒落にならない肉体労働（前書き）

鳥肉が好きです。

焼肉はホルモンとかタン元が好きです。ぶまい。

洒落にならない肉体労働

遠くの方で聞こえる可愛らしい囁りと不釣合すぎる鉄臭さに目を開けた。

ムツとするわけじゃないけど、確かに鼻につくそれに爽やかさは真逆に行く目覚めを体験した、私はかなり不機嫌だ。
むっすりとふてくされた顔をして、かなり可愛くない顔をしている
自覚はあった。

でも、だーれも見えてないから不細工な顔しててもいいと思うんだ、うん。

寝癖でボサボサの髪をなんとなく手櫛で整えつつ、大きな欠伸をしてから、ペットボトルの水を一口飲んでようやく目が覚めた。口に何か入れないと目が覚めないのは中々不便だけど仕方ない。

ぼんやりしたまま、周りを見渡していると苔まみれの犬の像が乗っていた土台が目に入った。

そういえば昨日の夜はここで寝たんだったなーなんて考えているとものすごく近いところからチュンの声が聞こえてきた。

まだ半分は確実に眠っている頭で辺りを見回してみただけ、チュンの姿は見えない。

「チュン〜？」

「ちゅんちゅん！」

「相変わらずいい返事なんだけど、どこにいるのかさっぱりわかりません」

「ちちちちっ！ちゅん…っ！」

「うつひゃあ？！って、あー……そういえば、昨日ここに避難したんだっけ？」

そくだよ！と言わんばかりにドヤ顔をしているチュンに苦笑して、胸の間にすっぽり体を埋めているチュンを取り出す。

私が片手で“むぎゅ”ってやらないことを分かっているのか抵抗はせずに静かに身を任せて、おとなしくしている。

なんか、暖かい塊のチュンを取り出した御陰でちょっと風を冷たく感じた。

冬には湯たんぽ代わりにいいかもしれないけど夏の暑い日にはオスメできなさそう。

…絶対蒸れる。チュンも暑いだろうしね。

「いよおし、さっぱりする為に川にいくぞー！ついでに水浴びと魚の有無を確認して、今日の夜には旅館でおいしいおいしいご飯を食べてやるー！」

「ちっちっちっ、ちちちちっ！」

「え、チュンは行きたくないの？」

「ちゅんちゅんー！」

ブンブンばさばさ、と首を横に降ったあと猛烈に羽ばたく彼（彼女？）に慌てた私はとりあえず落ち着けと必死に……雀相手に説得を試みていました。うう、人間が恋しくなってきた。異文化（？）コミュニケーション難しい。ぼでいーらんげーじは辛^{かる}うじて通じる程度です。

暫く人間と鳥のコミュニケーション（互いにほとんど一方通行）をすること数分、先にしびれを切らしたのはチュンだった。
ふふん、雀よりは忍耐力があるってことだよね！私。

「ちちちちっ！」

こっちだと言わんばかりに目の前で飛んでみせるチュンの片翼には昨日巻いた包帯がまかれている。

飛べるなら外してもよさそうだなあ、なんて考えながらおとなしくチュンへ視線を固定させた。

少しの間、飛ぶ自分の姿を私が目で追っているかどうか確認したらしいチュンはパタパタと軽やかに宙を舞う。

地面からおよそ30cmくらいの高さで羽ばたきを繰り返し、やがて私の死角に静かに着地する。

勿論私も、ぐるりと体をその方向に向けて座り直した。

「……………もしかして、結構前から居た？」

「ちゅん」

呆れたような雀の視線を受けながら、私はようやく自分とチュン以外の生き物に気づきました。

私の目の前にいるのは灰色の毛色をした、大型犬……のように見える生き物。

目は閉じられていて、呼吸は静かだったけどお腹の部分が上下しているのて生きてはいるらしい。

ここまでならただ眠っているようにも見えるんだけど、そーは問屋が下ろさない。

『いや、あのもうお腹いっぱいです』と言いたくなるような自体が次々に起こってくれるんだ、この森は。間違いなくこの森は手加減というものを知らないね！

簡単に言うと、このワンコが私が先程まで不快極まりない目覚めを体験した原因でした。

腹部のあたり

人でいうなら、横腹っぱいところ

結構豪快に。

幸い、乾いてはいるみたいだったけどかなり出血したのは間違いないだろう。

どうするのが一番いいのか、緊急事態に動き出した脳みそを活用して考えてみた。

1・川まで背負っていく

2・川まで横抱きしていく

3・川まで引きずっていく

とりあえず、3は却下だ。引きずられる犬が可哀想すぎる。

1か2で迷ったけど、リュックは前にして犬は背中に乗せていくことにした。

川に連れていった後は患部やついでに全身を洗える範囲内で洗って汚れを落とさないことには、なーんにも始まらない。

綺麗にしたら救急セットを使って、ケガの手当を簡単にする。

勿論、薬はチュンの片翼の治療に使った薬草だ。

あの薬草は水辺の近くにしか生えないみたいなので川に運ぶ方がいいろいろと便利なんだよね。

「でも、血がつくのはちょっとアレだなー……って、そうか！どうせ私も水浴びするんだし服に血がつかないようにはじめっから脱いでいけばいいんだ。蚊もいないみたいだし、かぶれそうな植物はなかったから大丈夫でしょ」

私の中で、この犬を放って先に進むという選択肢は何故か浮かばなかった。

別に特別親切な訳でもないし、優しいわけでもないことくらいは分かっているつもり。

どこかで見たり聴いたりしたゲームやら漫画やらに出てくる心優しいお姫様やら薄幸そうな美女もしくは美少女なんかを目指しているわけでもないし、なりたいたいと思わない。

そりゃー、困っていて“私”に助けを求めてくれた人なら、求めてきた相手が好きか嫌いかを判断した上で手を貸すし、一般的に手を差し伸べたほうがいいと判断できるような状況だったら迷わず手を貸すくらいの人間味はありとおもう。

とりあえずは善良な一般市民である私がだーれも見えていないこの裏・雲仙岳（とても有名な自殺の名所っていうオプシオンが付いてるよ！）で犬っぽいモノを助けようと思ったのは、先祖代々私の家はモフモフ好きだったからだ。

育ての親である祖父母曰く、江戸川家の血筋や江戸川家に嫁や婿に

くる人間は代々、甘党でもふもふした動物が好きらしい。

あ、もふもふしてない動物も嫌いじゃないよ！

私にとっての天敵はゴキブリにあらず。

ミミズ類や芋虫毛虫の類、後は蝶々と蛾だけだ。

カエルは素手で未だにつかめるし、蜘蛛だつてあまり大きすぎなければ手で捕まえてポイっと外に放り投げられる。バッタとかコオロギは勿論素手で捕獲が可能だ。

…どじょうは最近掴んでないから微妙なラインだけど、コツさえ思い出せば問題なく捕獲可能ですよ？

ぽぽぽーいつと服を脱いでリュックの中にしまい、寝袋や出していた荷物を収納し終えたらそれを前で背負う感じで準備は完了だ。いよっしゃ！いっちょ気合入れていきますかッ！

「ふんっ！……ふんぬぬぬぬ〜っ！！よっこいしょお！！」

犬の前足を肩に乗つけて、ぐいっとな犬の体の下に自分をねじ込む形で立ち上がる。

一応怪我しているから慎重に…でも素早く、犬のお尻の当たりを手で支え、なんとか犬を背負うことができた。

うーん、昔話で薪を取りにいったおじいさんの気持ちかわかる気がする。

重さで軽い前傾姿勢になるんですね、だから腰が曲がるんですね。わかります、わかりますとも。

えいさほいさと歩く私の頭にチュンが乗る。

実際に重みはほとんど感じないけど、何となく重くなった気がするのなんだろう。…自意識過剰？

この森は、少し一般的な…私が知っている森とは違う。

はじめの一日と二日目の最初の方は腐葉土とかいろんな人がパツとイメージする森（凄く暗くて不気味だったけど）に似ていたけど、今は苔のように地面全体がモシャモシャしたもので覆われているところが多くなった。

眠っていた場所は、珍しく背丈の短い芝生のような草が生い茂って寝やすかったんだけどね。

川へ近づくほど、大きな岩や小石が多くなっていく。

かなり歩きにくいけど、こーなりやもう意地と根性でたどり着くしかないだろう。

一歩一歩確実に足を踏み出しながら、昨日罌を仕掛けた場所に近いところにワンコを下ろそうかとも思ったけど……、よく考えたら今素っ裸だし犬も背負ったままだからこのまま川の中に突っ込んだほうが早いよねえ。

「そーなると、リュック下ろしてこのまま川に入ればいいか。チュンは自分で水浴びしてね」

「ちゅんっ！」

嬉しそうに鳴いて頭の上から飛んだチュンが川の中にある大きな岩に降り立った。

きよろきよろと周囲を見渡したかと思えば、一度大きく鳴いて、嬉しそうに川へ体を突っ込んだ。

なんだったのかはわからないけど、チュンなりに警戒していたのかもしれない。

それを見ながら、足だけでどうにか靴を脱ぐ。

「（昨日、怖い思いしたばかりだった……いくら人懐っこい鳥でも警戒するよねえ。ふつーに考えてあれはない。あの黒いのがびっちりいたと思うだけでゾッとするを通り越してウゾッとする）」

いくら単純な私の脳みそも、忘れられないものはある。

これまで生きてきた中でもTOP5に入るくらい嫌な思い出として記憶されちゃってそうだ。

死体の衝撃を上回るね、あれは。

「でも、寝てたのが犬でよかった。熊だったら流石にどーしよーもなかったもん……あれは絶対担いで川まで引きずってくるのは無理、ってその前に食べられてるか……ちゅん、あんまりそっちに行くと溺れちゃうよー」

「ちちちちっ！」

気持ちよさそうにしていたチュンに声をかけて私は冷たいと思われる川に入る心構えを終了させた。
ふっ、さっさと洗って魚の有無を確認しないとお腹すいて倒れちゃうもんね！

足先が川の水に触れて、ヒヤッとした感覚が駆け抜けた。

思わずブルブルってなったけど背負ったワンコは落とさなかったし、上出来と言えば上出来だ。

昨日から冷や汗とか脂汗とかかいてるはずだし、今日は今日で目覚めてすぐに肉体労働したから絶対、汚れてる。ふ、人がいなくてよ

かった：女以前に人としてダメになるところだった。
川があるんだから水浴びくらいいしないと何かがダメになる気がするんだよね。

「（全裸で大型犬背負って山道歩いてる時点で女なんて捨ててるけどさ。いーんだ、誰も見てないしこれは緊急事態だから。普段はもうちょっと慎ましい：箒だといいな）」

始めは上半身だけにするつもりだったんだけど、結構血がつく範囲が広そうだから脱いだんだよね。
あ、靴は履いてるよ！

この森で、生きてる人と出会わなくてよかったとこれほど思ったことはない。

いや：流石にパンツもはいてない状態で人に見られて樹海に住む得体のしれない生き物だとは思われたくないし。

ちよっと前に見たビブリ映画のワンコに育てられた少女でも姫でもなんでもないからね！

後ろから見たら毛皮背負った何かに見えるかもしれないけど！

川の温度に少しずつ慣れていった私はチュンがいる岩へ近づく。
あそこは一番深いところから少し離れているけど、私の胸の下くらいまでは水位があるはずだ。

じゃっばじゃっばと川の中を進む。

藻が生えているらしい川底の石たちは注意しないと滑るけど、気を付けてさえいれば問題ない。

背中に背負っている犬は相変わらず大人しくしていてくれるのでバランスもなんとか保てている。

急に暴れたりしないか一応は気を付けつつ、流れの穏やかな川をわたっていく。

「ちゅん！」

「とーちやく！さてと、…こっからどーするかなー……」

「……ちゅん」

とりあえず、背中にいる気を失った大型犬をどうやって岩に乗せるかが問題だ。

体力？そんなもの残ってたらくくにひょいっと乗せてますよ。

洒落にならない肉体労働（後書き）

冬のイベントは、基本的にケーキを食べるためにあります。

クリスマス？そんなの財布が寒々するだけさ！！

……大人になったなあー………実に色んな意味で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0334y/>

正し屋本舗へおいでなさい

2011年11月25日23時46分発行